

## ツヴィングリ、ルターの聖餐論争とマールブルク会談

ヴァルター・ケーラー  
瀬原義生 訳

## 1. ツヴィングリ、ルターの聖餐論争

感動的な神学上の問題に、イエス・キリストの晩餐をいかに正しく理解するか、という問題がある。ここでもまたツヴィングリは、その改革を始めた最初の年には、良きカトリック教徒として、〔パンとぶどう酒のなかの〕キリストの身体と血の実際の現在を疑わず、改革提案六七カ条の解釈においても、彼はこの点について公然と承認を与えている。宗教改革者たちは、このようなミサ犠牲の変化という秘蹟に対して反対しており、そのような秘蹟こそは、十字架上のキリストの一回限りの贖罪行為をおとしめる「坊主の作り事」以外のなにものでもないとしていた。しかし、ツヴィングリの聖餐理解は、その発端から発展を遂げる萌芽を秘めており、彼がそれを果たせるかどうかの問題であった。問題はその発展の仕方いかにある。キリストの現在は、彼にとっては、神秘的な不確定なもの、はなはだ感覚的の観念にとどまっていた。キリストの身体が天から降りてくる、あるいは、十字架に掛かったキリスト、その十字架に掛かった身体が、おどろくべき仕方でも供儀パンのなかで輝く、そういったことを彼は拒否した。神秘説はみな、秘密裡にそういった考え方を包み込んでいる、と。そういう仕方ではなくて、信じられるものとして受け容れられるものが問題なのである。「信仰のあるところで、ひとは聖体を食べる。つまり、〔聖体を食べる時〕要求されているもの、それは信仰なのだ」。それこそは、ロッテルダムのエラスムスの考えであり、ツヴィングリもこれに与したのであるが、エラスムスはこの考え方を、幼年時代を過ごしたネーデルラントの共同生活兄弟団の敬虔な見方からえたものであった。しかし、ここでは敬虔さに人文主義的知とが合一していた、つまり、この神秘説には、古代に溯る哲学的要素がかくされていた。それは精神的なものと感覚的なものを対立させる思想であった。それは、キリスト教において「霊」と「肉」が対立させられよう、宗教的倫理的意味ではなくて、形而上学的対立の意味のものであって、後者は、多かれ少なかれ、人間存在の原初から、二つの宇宙論的基本原理としてずっと戦いを繰り返してきたものであった。ここでは、それ故、「霊」はつねに物質の上に一定の抽象化された高さにあって漂うが、物質と結び付き、それによって汚される。しかし、霊はただ霊によってのみ理解される。だからこそ、聖餐の秘蹟における信仰の強調となり、その感覚化の拒否となるのである。秘蹟が感覚的手段を通じての神の恩寵の施与であるとすれば、霊のこのような見方のなかに、教会の秘蹟の廃棄、ミサの対象から主体〔受け手の態度の在り方〕への重点移行が潜んでいた。しかし、そのような異端的教説には、慈悲深くも、神秘のマントがかぶせられていた。

さて、オランダ、ハーグの弁護士コルネリウス・フーン Cornelius Hoen の法律家的な鋭い感覚が、隠された問題にぶかった。彼は、共同生活兄弟団の若者の一人で、中世の宗教改革者のウェツセル・

ハンスフォルト<sup>1)</sup>の著作に刺激されて、晩餐の聖体定置の言葉をよくよく考え、そこからあらゆる感覚的理解を排除した。キリストはパンを分けるとき、精神的・象徴的行為として、「これはわたしの身体を意味する」と考えたのだ、と。ちょうど花婿が花嫁に、担保として指輪を贈るようなものであり、そのさい彼は、指輪が実際に彼自身で「ある」わけではないが、指輪に自分自身を託して与えるのと同じである。ある手紙で、フーンはこの考えを書き、おそらく1522年、ユトレヒトのヒエロニムス学校長のヒンネ（ヨハネス）・ローデ Hinne (Johannes) Rode がそれをヴィッテンベルクのルターのところへもたらしたが、その手紙は本来はエラスムスに届けられるはずのものであった。1523年、ないし1524年の二回目の旅行のとき、ローデとゲオルク・サガヌス Georg Saganua が、この手紙をツヴィングリへもたらした<sup>2)</sup>が、二人のネーデルラント人はバーゼルのエコランパッドによって、そうするように指示されたのである。こうしてルターもツヴィングリもこの書簡を読むことになった。

それは、まったくちがった反応をえた。それは不思議なことではなかった。なぜなら、ルターは、ツヴィングリ同様、まだ聖餐問題について悩んでいなかったからである。彼はミサ供犠に反対し、聖餐におけるキリストの実際の現在を確信し、教会の変化説を拒否し、すべての価値を信仰のうえにおいていた。「信じて、君たちは食べよ」、そして、この信じてでの食事は、秘蹟受領とは結び付けられてはいなかった。この時点では、ルターとツヴィングリのあいだの違いについて、云々することはできない。しかし、ルターにはエラスムスの基礎はなかった。彼は、フランス人ピエール・デリー（1420年没）<sup>3)</sup>に依拠し、最後の根拠として自分自身の宗教的体験をもっていた。これは、しかし、エラスムスにおける霊の古代的考え方とは全く反対の方向を取るものであった。彼は、自分の救済確信のための稔り豊かな闘いから、神の受肉、神がキリストという人間になられたことに、救いを見出していた。すなわち、キリストが、われわれ人間すべてと同じ、肉と血をもった人間であった、ということにである。そこでは、信ずる者は、神を、真の人間であるキリストの「なかに」、まさにこの肉欲をもった者の「なかに」、その者と「ともに」、その者の「上」ではなくて、その者の「下」に見出し、持つのである。神性はけっして自己を啓示せず、つねに幕におおわれており、幕を透かして、それは信仰に輝き出る。こうして神は、洗礼の水のなかに、福音説教者の言葉のなかに、そしてまた、晩餐のパンとぶどう酒のなかに現れる。ここでは、精神的高めへの気化は排除されており、まさに、聖体定置の言葉「これはわたしの身体である」の「である」は、価値高く強調的である。なぜなら、それは、物質的諸要素の「なか」の神的救済者の存在を保証しているからである。それでもなお、対立点が隠されていた。よく知られているように、二人の改革者のあいだの聖餐論争は無益な言語上の争いではなく、神とその地上における働きに関する見解の根本的相違を内蔵するものであった。それを、キリスト教と古代世界の対立と等置することはできない。なぜなら、古代的要素はすでに古代キリスト教のなかに吸収されているからである。ルターもツヴィングリもともに聖書を引き合いに出しているが、それは両者にとって当然のことであった。ツヴィングリはヨハネ福音書にギリシア精神を感じたとき、ここに「ダイヤモンド」があることを発見した。「人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない」（ヨハネ福音書、6、63）。彼はこの語句を「太陽」と称したが、だがしかし、この福音書の発端部、「甲冑と中心教理」全体に対する冒頭には、またもや「そして、言は<sup>ことば</sup>肉体となった」（ヨハネ福音書、1、14）の語句があり、ルターはこれでもって、あらゆる異端者に対して戦っているのである。

オランダ人の手紙が、ツヴィングリにとって、薄暗い神秘の覆いを取り去り、彼の聖餐に関する

見方の物質的要素を完全に振り落とし、ただ信仰する心情の価値だけを存続させた。晩餐は、キリストの死の犠牲を記念する食事である、そして、この犠牲が救済をもたらすものであるが故に、その食事は喜びの食事であり、現前の神、主上を前にしての不安な震えではなくて、主との言祝ぐべき一体化をなしたという告白であると同時に、神の意志を満たそうという義務感の現われである、つまり、反対者たちがあざわらうような、通常の飲食ではなく、儀式としての食事なのである。それは、もちろん、もはや「秘蹟」ではない、そして、聖餐問題の概念説明において、ツヴィングリは首尾一貫して、この用語を突き放して述べている。「わたしは、ドイツ人が〈秘蹟〉という用語を今後受け入れないことを非常に望んでいる。なぜなら、これまで人々はその言葉を聞いたとき、その言葉のもとに偉大さと聖性を理解し、その固有の力によって罪から良心が解放されると理解してきたからである」。この宗教的価値の魔術的物体を、ツヴィングリは禁止する。神と人間とは、物体のうえに在るのではなく、神的理念を記念するような象徴、ただ象徴のうえに在るのである、と。彼の新しい認識を、ツヴィングリはさしあたって手書きの文書にし、それは多数の手写を通じて、考えを同じくする人々にあいだに広まったが、その一人にロイトリンゲンの教区司祭マテウス・アルバー *Matthäus Alber* がいた。おそらくこの男のために、ツヴィングリは文書の著者名を無名氏としたのであろう。なぜなら、このシュヴァーベン人は異端裁判に巻き込まれ、エスリンゲンの帝国政府のまえに引き出されていたからである。1525年3月、『マテウス・アルバーに宛てた書簡』<sup>4)</sup>は出版され世間は聖餐に関するツヴィングリの考え方を知ったのであった。その矛先は慎重に覆われており、ルターの名前はあげられていないが、事実をはっきりと彼に向けられていた。

ところで、運命というべきか、聖餐の言葉の新しい解釈をもった第三の男が登場する。アンドレアス・ボーデンシュタイン・フォン・カールシュタット *Andreas Bodenstein von Karlstadt* がそれであるが、彼ははじめヴィッテンベルク大学の教師をし、次いでオルラーミュンデの教区司祭をつとめ、1524年9月からは熱狂者のかどでザクセン地方から追放されていた。ツヴィングリと同様、彼もまた聖餐におけるキリストの身体と血の実際の現在を否定したが、ツヴィングリと違った風に解釈する。すなわち、キリストは自分自身を指し示して、いう。「これは、お前たちに与えられるわたしの身体なのだ」。五編を下らない論文で、彼はこの解釈を世に問うた。それを知るやいなや、ルターは反論をしたためた。『天来の預言者らを駁す』<sup>5)</sup>がそれであり、そこでは、カールシュタットと「その同信者たち」が槍玉にあがっている。その「同信者」に、ルターはツヴィングリを含めている。「スイス、チューリヒのツヴィングリとレオ・ユート<sup>6)</sup>とは、カールシュタットと同じことを考えており、それよりはるかにこの悪を横行させている」と、彼は1524年11月17日に書いている。これは、8月末に、ヴェルトハイムの教区司祭フランツ・コルプ *Franz Kolb* が聖餐定置の言葉についてどうしていいか判らず、ルターに問う合わせてき、それに答えたものである<sup>7)</sup>。そのとき以来、ルターにとって、中傷にもひとしい手紙を根拠にして、ツヴィングリの評価は固定した。ツヴィングリは熱狂主義者、秘蹟信奉者であり、カールシュタット、トーマス・ミュンツァー、再洗礼主義者ともども永劫の罰にくだされるべき者である、と。ツヴィングリの書いたものをなにか読む以前に、ルターの判断は固められ、残念ながら、それは彼が死ぬまで変わらなかった。ルターはけっしてツヴィングリに対して信頼を抱かず、他方、ツヴィングリの方はルターを尊敬することをけっして忘れなかった。名の通った「良き友人たち」のけしかけも、そこここにはないわけではなかった。ロッテルダムのエラスムスも、それに係わりをもっており、ツヴィングリとその友人エコランパッドをして、より若いカールシュタットを追尾させることになった。

ルターは、その後まもなく、マテウス・アルバーに宛てられた手写されたツヴィングリの手紙を入手した——ヴィッテンベルクにおいて、そうした手紙がこっそりと流布しているのは、危ない地雷にひとしかった。よくあることだが、異端はただ一つの誤りに負うことは稀で、もしルターがツヴィングリの著作を読み、あるいは聞けば、それだけますますツヴィングリ不信はさらに広がったことであろう。ルターはツヴィングリの正しい信仰体験を認めていない。ルターが聖餐のなかに幻想的にでも「見出した」キリストを経験できないとは、ツヴィングリの宗教体験とは一体なんであろうか?! カトリック的慣習を廃止しようというチューリヒ人の急進主義についても、ルターは苦情を述べる。教皇たちのもとで受け入れられてきたものすべてが疑わしいわけではない。「見よ、原罪に関する教えのなかで、ツヴィングリがどこへ向かっているか」と、ツヴィングリの『洗礼について』という著作（1525年5月末）の読書のあとで、ルターは叫んでいる。チューリヒ人は、アダム以来の人間の罪性を否定していないし、原罪についても、もちろんそうである。罪は人間の責任ある行為の前提であり、相続された性癖、「受け継がれたひ弱さ」がそこにあり、ちょうど若い狐に種族のこすっからさが付着しているようなものである。しかし、罪というのは自然の宿命といったものではない——この思想の背景には、またもや霊と肉欲の対立という古代的観念がある。ルターは、人間の責任性の強調のなかに、人間の救済欲求の弱体化を感じ取った。聖餐問題は、パンとぶどう酒のなかにおけるキリストの身体存在の可能性、あるいは不可能性というまわりくどい論議へ、さらにキリストのなかにおける神的性質と人間的性質の相互の関係の問題へと導き、最後に神の全能と聖霊の働き——それは、晩餐のパンのなかにキリストが入るように、洗礼水のなかに入りこむ——の問題が、全く対立する信仰告白を並立させることになった。ルターが、ある著作の末尾に、箇条書きにした信仰告白——ルターはそれを自分の『聖餐に関する大いなる信仰告白』（1528）<sup>8)</sup>と名付けた——を置いたのも、驚くにはあたらないし、また、聖餐観の違いを過大に強調されるほどの重要性をもたない個別的問題として切り離すことができないルターの側の信仰告白精神についても、驚くにはあたらないであろう。この改革者は、はじめから「体系」的に物を見ていたのである。

「なお、ずっと彼らは叫んでいる。なぜルターは黙っているのか？なぜ、彼は自分の考えを告げようとはしないのか？」電光と雷鳴を発するジュピターのように、改革者〔ルター〕がシュトラスブルクの印刷業者ヨハン・ヘルヴァーゲン Johann Herwagen へ宛てた手紙によって雷雲を切り裂いたのは、1526年9月13日のことであった。小競り合いのなかで、あちらこちらでさまざまな雲塊が湧き起ったが、真のルターはスイス人たちにとってはついに隠されたままであり、彼らは自分たちの眼鏡でルターを見、ルターから信仰の強調を受け取った。ルターは、初期の著作のなかで文字通り前面に押し出した信仰を、秘蹟すべてについてと同様、聖餐についても要求したが、論争の過程で生まれてきたキリストの客観的現在いかにという論証問題に反論して、ルターはあくまで信仰を押し出し、〔スイス人たちにとっては〕ルターが初期の姿勢で後期をも演じ切ろうとしていると感じられたのであった。印刷業者への書簡ののち、ルターとツヴィングリのあいだに個人的衝突が起こる。ルターの側からは、『キリストの身体と血の秘蹟についての説教』（1526年）、『〈これは、わたしの身体だ〉という言葉はなお確かである』（1527年）、『聖餐に関する大いなる信仰告白』（1528年）<sup>9)</sup>、ツヴィングリの側からは、『愛すべき釈義 Amica Exegesis』（1527年）、『喜ばしき弁明と反論』（1527年）、『〈これは、わたしの身体である〉という言葉は、永遠に古くからの意味をもち続ける』（1527年）、『〈信仰告白〉と名付けられたルターの著書について』（1528年）<sup>10)</sup>が出版された。しまいには、話の多くが食い違い、ののしりの言葉もせすに済まされなくなった。ルター派は「肉をむさぼり食

う者」「パンと化した神の崇拜者」と名付けられ、ツヴィングリ派は「悪魔に与する者」といわれた。全体的に見て、ツヴィングリの方が、物事を超越したより高尚な闘士であったが、彼にとっては、信仰の成熟は聖餐問題には係わりをもたなかったからである。ルターが罪のゆるしを信仰に求め、したがって彼がゆるしを文字通りキリストのなかで「把握している」ところでは、ツヴィングリは、霊的眞実の具体化を必要とする「間抜け」に、譲歩をしてもいいと感じたようである。「われわれの眼もまた、〔その具体化を〕見ようとおもっている」。

隣人越しの口喧嘩にさいしては、隣人自身が垣根となるはずである。しかし、その隣人自身があちこちで介入して、平和調停者にはならなかった。隣人は調停者でないどころか、むしろ扇動者になり、こうして彼らは、二人の巨人の争いを自分たちの、多くは小さな個人的目的のために誤用した。1525年4月11日、チューリヒ市参事会において晩餐の実際的改革について協議されたとき、強力な少数派の代弁者として、下級書記ヨアヒム・アム・グリユート Joachim am Grüt が、ツヴィングリの聖餐教義を攻撃した。魂の救済と信仰のためという名目においてである！「わたしは、パンにおいて、眞実の身体と眞の血を食するものと確信しております」<sup>11)</sup>。不思議なことが起こった。チューリヒの書記と並んで、ウーリ州出身の第二の、地方書記ファレンティン・コンパル Valentin Compar が立ち上がった。ツヴィングリは、特別な著述『聖体は付属物か、それとも冠か Subsidium sive coronis de eucharistia』(1525年8月)<sup>12)</sup>で、この二人と対決した。彼はその象徴理論を聖書によって証明することを夢中になって追及した。それが彼に第二の基本的語句、出エジプト記 12、11 を与えた。すなわち、これは「主の過越<sup>すぎこし</sup>である」とあるが、それは食事を「意味している」。しかし、エラスムスは、ツヴィングリの敵にきわめて危険な武器を握らせた。彼はツヴィングリとその一派に反対して、ルターをカトリックの側に置いた。「聖書の言葉はルターさえをも、カトリック教会が認めているところの信仰告白をよぎなくした。ルターはカトリックの信仰から好んで離れていったはずなのだが」。ツヴィングリの敵対者たちは、得たりや応とこの証明根拠を取り上げ、聖餐論争においても繰り返しこれに触れ、そして、成功を収めた。それは、多分次のような理由からであろう。ツヴィングリが部分的にしか正しくなく、キリストの身体と血の客観的現在というルターとカトリックの教理の共通性を越えて、カトリックの場合には聖体に変化させられており、ルターの場合には聖体が変わらないで持続しているという、パンとぶどう酒に対する両者の関係の違いを公表しないままであったことによるものであろう。この至高なる秘蹟におけるルターとカトリックの一致は、ほとんど心からの協商にまで推し進められ、爆裂火薬のように作用した。それは、ツヴィングリをして、その聖餐教理の定式をなんらか「ルター化」することを不可能にした。彼は個人的にはそうしたかったにしても、人民の意志においてはそれは問題にならず、ツヴィングリはその多数意志に依存していたからである。「ルター主義」は、この点においてほとんど「教皇主義者」と同様であり、チューリヒの改革者がなんらかルターに手を差し延べた場合には、その全事業が危機にさらされることになろう。チューリヒの市民指導者たちは、政治的に「ルター」によって悩まされることを欲しなかったのである。

ツヴィングリが、提案された統合定式文に対して、苦り切りながら、脆弱さを示したのはそういうところからくる。バーデン、そしてベルン公開討論会において、聖餐教理が前面に押し出されたとき、そうであった。その定式は、アム・グリユート、ファーバー<sup>13)</sup>、エック、トーマス・ムルナー<sup>14)</sup>によって作成され、ローマ教会もまた承認したものであった。ここにおいてスイスの宗教改革は、世論において手ひどくやっつけられることになりそうであった。教皇クレメンス七世は、聖餐問題

について討論させという名目で、ツヴィングリをローマへ召喚しようと試みた。そして、そこでは、ルター問題を手掛けてきた枢機卿カエターヌス、トーマス・ヴィオ・ダ・ガエタ Thomas Vio da Gaeta が、ツヴィングリの著作『真の宗教と誤てる宗教に関する注釈』<sup>15)</sup>——この著作をカエターヌスに渡したのはアム・グリユートであった——から抜き出したツヴィングリの聖餐教理に対して、反対テーゼを出そうというわけである。すべては、そして、多くは次の視点のもとで企てられていた。「ツヴィングリの教理や著書とルターやその他の人々のそれ——それについて、カエターヌスは好意的に言及している——とを調停するのではなくて、聖なる信仰について書かれた当該諸箇所において、彼ら全体に反対することにある、と」<sup>16)</sup>。1526年6月、エックが「聖餐に関する彼の腐敗した考え方によって地上全体を混乱に陥れた」と、シュトラスブルクの人ニクラウス・ゲルベル Nikolaus Gerbel が判断しているのも、けっして誇張したことではなかったのである。

帝国内のツヴィングリの隣人たち〔プロテスタント〕は、聖餐論争を違った憂慮で迎えていた。彼らはこの不和が自分たちの陣営に災いをもたらすものであること、ますます強固になりつつあるカトリック側の結束に対して、現在ある自分たちの統一と力を強める必要があることを痛感していた。つまり政治的観点がここでは問題になっていたわけであるが、〔政治的〕統合を欲すれば、それは障害——それも神学的な類の——の除去によってはじめて可能であるので、ここでも宗教問題に大きな関心をもたれた。神学者に属するものを神学者に委ねなくてもよい、政治に属するもの、すなわち宗教的対立を無視して政治的同盟に結集することが可能——それこそ近代的国家理念のきらめきだが——か否かという判断は政治にだけ委ねるべきだという場合でさえも、宗教への関心はなお大きかった。宗教をなお完全に脇に置いておくことはできなかったので、〔宗派間の〕共通性があちらこちらと捜し求められ、宗教が政治的共同性に支持力のある基礎を与えるものかどうかを検討された。そして、検討の結果、良しという判断が下されたとき、信仰上の相違をそれほど重要と考えない、「本質」という基礎が現れてきた。実際、ツヴィングリとルターの聖餐論争から、「キリスト教の本質 ratio Christianismi」という意味深い概念が生まれているのである。シュトラスブルクの宗教改革者マルティン・ブツァーがその概念を打ち出している。それは偶然なことではない。地政上の中心にあるということが、教理の仲介者となるべく運命付けられていたようにおもわれる。この指導的人物は、ハイデルベルクの学生として、1518年、マルティン・ルターの公開討論会から忘れ難い印象を受け、その後1523年以来、ツヴィングリと関係をもち、シュトラスブルクの宗教改革事業——まずは典礼の改革からはじまった——にあたっては、ツヴィングリから大きな影響を受けたが、全面的な彼の心酔者となることはなかった。同郷人ヴォルフガング・カピトー<sup>17)</sup>——彼はハーゲナウ出身、ブツァーはアルザスのシュレットシュタット出身——、バーデン人のカスパール・ヘディオ<sup>18)</sup>、アルザスのカイザースベルク出身のマテウス・ツェル<sup>19)</sup>がブツァーに味方し、ブツァーははじめから聖餐論争において和合をえることに尽力した。「われわれの信仰においては、われわれは主の身体と血を思い出しつつ、主のパンとぶどう酒を食すべきであり、その他のことは断念する」。シュトラスブルクの改革者は、1524年と1525年の二回、個人的にルターに会ったが、ルターから好意をえることはできなかった。神学上の対立者を統合するためには、もっと強力な政治権力を必要とした。それを具体化したのが若きヘッセン方伯フィリップ（1504年生れ）であった。

彼はツヴィングリに接近する道をどのようにして見つけたのであろうか？ 彼は1524年、メランヒトンを通じてルターと知り合ったが、1526年はじめ、ツヴィングリとエコランパッドの著作物を

ヴィッテンベルクのルターら二人のところにおくっている。「新しい誤りに反対して、なにかをつくり出すとすれば、それこそあなたがすべきことだ、とってわたしに送られてきた」。それから間もなく、フィリップはツヴィングリの方に面を向けることになるが、そのさい主として寄与したのは、フィリップの友人のヴェルテンベルク大公ウールリヒであった。「目茶苦茶な人」——かつてツヴィングリはそういったことがある——落ち着きのない大公は、放縦な情熱のために大公国から追放され<sup>20)</sup>、1523年バーゼルに滞在し、ここでヨハネス・エコランパッドや同様に領地から追われた騎士ハルトムート・フォン・クロンベルク Hartmut von Kronberg によって、宗教改革派に移った。すなわち、彼はスイスに広がっている宗教改革者のなかに、彼の領地を回復するための新しい手段を見出したのであった。なぜなら、この回復こそが彼の行動の目的であり、「長靴によろうと、短靴によろうと」どうでもよく、あらゆる手段が彼にとって正当なものであり、農民——彼は「ふざけた農民 Utz bur」としてふるまった——がそれででありえなし、あるいは、現在ではスイス誓約同盟がそうであった。そこからチューリヒ、ツヴィングリへと糸が張られ、1524年11月18日、大公ウールリヒはリーマット河畔都市〔チューリヒ〕へ入った。ここで彼がどうふるまったかは残念ながら明らかではないが、おそらく、当時の用語で「計略 Praktiken」といわれたこと、近代の用語でいう秘密外交が演じられたのではなかろうか。噂にあったような「永久同盟」は結ばれなかったが、拘束のない政治的接触があったことは確かである。ツヴィングリも、はじめのうちは手の内を見せなかった。不信が払拭されたのは、次の出来事のことであった。すなわち、1519年、ロイトリンゲン市が大公によって占拠されたが、それはフランス人傭兵を雇って行われたといわれる。わざとではあるが、大公はチューリヒのグロースミュスターでの祈禱を乞い求め、チューリヒ人は、ツヴィングリに祈らせるように指示したと答えた。まさしくそれから両者のあいだに活発な交流が生まれた。ツヴィングリはその政治的プランのなかにヴェルテンベルク公を取り入れた。大公は、隣人としては「〔オーストリア大公〕フェルディナントよりもはるかに良い」。つまり、オーストリアに対抗する視点が働いているのである。スイスの方に突き出た太い丸太に似たホーエントヴィール領をふくんだメンペルガール Mömpelgard 領を所有することによって、福音派のヴェルテンベルク大公は、〔スイスに対する〕東西からするオーストリアの脅威に対する〔西方の〕強力な障壁をなしていた。大公が文字通りエゴイスティックな人物であったとしても、ツヴィングリが当時彼をザンクト・ガレンやシュトラスブルクに推薦したのも、スイス側の現実政治の要因からであった。しかし、時期はなお熟してはおらず、ヴェルテンベルクを取り返そうという大公の試みは失敗した。その失敗は一部はスイス人のせいであったが、彼ら、チューリヒ当局の意に反して〔ヴェルテンベルクへ侵攻しよう〕大公のもとに馳せ参じた者が、パヴィアにおけるフランス兵に対する皇帝軍の勝利という知らせを聞いたとき、勇気を失ってしまったのである。そして、いまやオーストリア大公フェルディナントは、ウールリヒ大公のスイスからの退去と賠償を求めてきた。1527年新春、ウールリヒ・フォン・ヴェルテンベルクは、甥のヘッセン方伯フィリップのところへ移住した。スイスでは、だれもそのことについて悲しまなかった。わがままな、追いはぎに対してさえもたじろがない大公の野蛮さが不機嫌になっただけであった。しかし、〔大公と〕ツヴィングリとエコランパッドとの関係は、詳細には判らないが、断ち切られなかった。「われらの」ヴェルテンベルク大公は、まもなく、ヘッセンからエコランパッドを通じて、ツヴィングリに個人的挨拶をおくってきた。そして、すでに方伯も大公とともに「日々われら（ツヴィングリとエコランパッド）のことを思い出している」。もちろん、方伯は「なお聖餐問題で動きが取れなくなっていた」。そこで、バーゼル人〔エ

コランパッド]と大公とは、方伯をルターから解放しようと企て、「福音信仰をさらに促進するために、カッカッと燃えている方伯に」、スイス人の聖餐に関する著作をこっそりと手渡した。エコランパッドは正しかった。「方伯は専制君主ではなかった」。彼は違った種類の聖餐教理に与するようになり、エコランパッドは「非常に愛されることになった」。そして、方伯は、あちこちの対立者たちを宗教討論会のテーブルにつかせ、対立を調停しようという天才的プランを抱くにいたった。すでに1527年夏、彼はルターに問い合わせたが、ルターは拒否した。その後1528年2月、ツヴィングリ主義が嚇々たる成功を取めたベルン宗教討論会の直後、方伯は、ウールリヒ・フォン・ヴェルテンベルクを通して、エコランパッドに宗教討論を受け入れるようにという要望を伝えた。そして、12月、方伯はヴォルムスで、シュヴァーベン同盟に属する福音派都市との交渉にさいして、声高に次のように宣言した。「主がこの不和からわれわれを救い出し給わんことを、主にお願ひする。神のご意志をもって、わたしは、エコランパッドとその同信者、ルターとその同信者とを、わたしの護衛、わたしの費用のもとで、会合させようとおもう。そのために、わたしは6000グルデンを支出するつもりである」と<sup>21)</sup>。

それ自体としては、討論会は教理上の争いを解決する通常の方法であり、ライプツィヒ、バーデン、ベルンがそのいい例である。すでに1525年、ネカー河畔グッテンベルクにある領主ゲンミンゲンの城で、ヨハネス・ブレンツとハイデルベルクの人シモン・グリネウス Simon Grynaeus のあいだで、聖餐問題に関する討論が行われていた<sup>22)</sup>。そして、シュトラスブルク人は、われわれが知っているように、ヘッセン方伯を動かし、彼らと接触することが重要だという考えを生み、1526年シュパイヤー帝国議会で彼らと接触させることになった——方伯はその少し以前にシュトラスブル市長ヤーコプ・シュトゥルムと接触していたが。しかし、方伯が企画した宗教討論は、最初から、神学上の調整の試み以上の意義をもっていった。それは、方伯の政治的力量的増大をもたらし、方伯はカトリックの統合政策に反対する福音派の旗頭となり、1525年にはカトリックのデッサウ同盟に対して、ザクセン選帝侯とゴータ・トールガウ同盟を結成し、それに対置した。「わたしは忠義者エツカルトの如くに行動し、わたしは助言し、いよいよのときは、軽蔑されないように、と願う。なぜなら、ひとはそのように助言されることを欲するものであるからだ。いま、その時だ。ランプが燃え尽きるまでに、眠り込んでしまったら、われわれのところへ花婿は入ってこないだろう」。すでに見てきたように、カトリックの行動がスイスにまで伸びてきたいま、スイスは帝国の福音派の政策にまきこまれるほかはなかった。そのさい問題になるのは、最終的政治目標がどのように設定されるかであり、「討論者」の一人ルターがそのような政治化に関心があるかどうか、であった。それは、もちろん、信仰を政治に引き渡すことを意味しないが、ルターの考えでは、彼自身がその主人であり保護者となった信仰に奉仕し、それを守ろうという権力者たちの結合を生み出すことになる。それは、完全に可能であろうか？ 聖餐の秘蹟という重要な問題においては信仰を同じくする者だけでなく、ルターの判断によれば、再洗礼派、カールシュタット、あるいは粗野な革命家トーマス・ミュンツァーといったような「熱狂者的精神」の持ち主たちとも運動を一つにしていくことが、果たして可能であろうか？ カトリックの陣営によって、「再洗礼派」と「ツヴィングリ派」とは、帝国法において同様に取り扱われるようにと、故意に並列されたが、1529年の第二シュパイヤー帝国議会において、この結び付きは困難な外交上の戦いにおいて打ち砕かれた。しかし、不信感は残り、そのため、ルター派の側では、ツヴィングリ派との政治的同盟を結ぶ前に、自分たちの信仰の純粹性を信仰告白の形で確かめておこうという欲求が生じた。そこで、同盟に入る前に、自陣営内部の敵



に対して向けられた信仰告白が作られた。ブランデンブルク＝アンスバッハ辺境伯ゲオルクは、帝国都市ニュルンベルクと同盟を組むにあたって、ザクセン選帝侯よりももっと強く、この〔ルター派の〕教義による政治の拘束化という立場を示したが、両者の背後では、ルターが決定を下していた。

同盟と信仰告白の間の戦いが生まれた。第二シュパイヤー帝国議会が宗教改革を存立問題のまゝに立たせ、4月19日、福音派諸侯たちの厳かな抗議が宣言された——それには、まもなく、シュトラスブルク、ザンクト・ガレンを含めた13の南ドイツ帝国都市が同調した——とき、同盟結成がさし迫った問題となった。三日後、北ドイツの諸侯と南ドイツ都市とは、後者のツヴィングリとの接触をにもかかわらず、宗教と政治の相互防衛同盟に入ることに同意した。

同日、ヘッセン方伯はさらにもう一步踏み出していた。彼はチューリヒのツヴィングリ宛に手紙を出しているのである。すでに口頭では、帝国議会へスイス人を招致することが語られてはいたが、いまやそれが現実になろうとしている。「われわれは、ルター、メランヒトン、その他、秘蹟に関してわれわれと意見を同じくする人々——シュパイヤーで、ツヴィングリ派のために力を尽くしたのはシュトラスブルクであった——を適当な場所に集め、慈悲深く全能なる神がお恵みを与え給うことについて、聖書にもとづいて同一の箇条書を作成すべく調停し、満場一致のキリスト教信仰のもとに生きたいものと、目下作業し行動している<sup>23)</sup>」と。方伯は、さらに付け加えている。教皇主義者たちは、帝国議会において、純粋な神の言葉の信奉者たちのあいだの不一致から利益を引き出しており、不一致がなくなれば、「いたずら行為」に終止符を打つことができるであろう、と。この戦線への言及は、感銘を与えないはずはない——その戦線とはツヴィングリのそれでもあり、オーストリア大公とヨハン・ファーバーという人物を中心に結成されたものとしても理解された——と、方伯は計算していた。ツヴィングリは、直接的には招待されておらず、あなたは「われわれが、あなた方とひとしくルター派の人々とを指定された時、都市で会わせるつもりであること」を心得、それを推し進めてほしいと述べられている。——最初の接触として、それにふさわしい控え目な申し出であった。

討論のための集合期限は10月初頭と決められた。そのように定められたのには、当然のことながら時間を食う予備的交渉は別として、信仰告白の問題にその責めがある。ヘッセン、ブランデンブルク＝アンスバッハとザクセンのあいだで協議が行われた。両者は、双方ともはげしく苛立った揚げ句に、次のような結論にたっした。「シュトラスブルク人とその他の多くの熱狂者たち——ツヴィングリ派のことだ——に関しては、同人たちといかなる後援者的了解に入ることはしないことに最終的に決定する」と。ルター派は基本的にこの立場を固守し、そして、ルターを頂点とする神学者たちは、外交官たちに、きわめて強力な防衛基礎として聖餐教理だけでなく、17箇条にまとめられた信仰告白、いわゆるシュヴァーバッハ箇条書という「全信仰」を提供した<sup>24)</sup>。この防具と武器が整うとともに、ルターの側で、宗教討論に出席しようという決断が下された。わざわざ決断されるまでもなかった。

「明らかな喜びをもって」ツヴィングリは〔4月22日付けの〕方伯の手紙を受け取った。それを見た瞬間、心と心が通じあった。5月7日の彼の返事<sup>25)</sup>は、正しい道を知っている唯一の人として、方伯をたたえている。「さらに進み給え、至聖なら侯よ。あなたが、なんらかの策謀によって敬虔なる計画から逸そらされることのないように」。「心から喜んで」わたし（ツヴィングリ）は出席いたしましょう、たとえ神のような予見がさえぎったとしても、わたしは出席の意義について疑いません。——正しい理解において、彼は自分が要請されていることを感じ取り、場所と期日の指示を求めて

いる。彼はまた一つの注文を付け加えた。方伯は、自分をもっとも来てほしいとおもっている人物を、双方の対立するだれかれよりも、まず知らしてほしい、そして、「真理の反対者が旅につくまえに、わたしたちがあなたのところへ着けるように」事を急いでほしい、と。いいかえれば、ルター派は不意を襲われ、既成事実のまえに立たされるというわけである。方伯は、この限りでは、注文に従い、ルターはツヴィングリの来ることを事前に知らされていなかった。ツヴィングリは、さらにヘッセン方伯に、彼の国外旅行を国法的に可能にするための手続きを求めている。すなわち、ツヴィングリを「必要としている」むねの書簡をチューリヒ市参事会に送ってほしい。手紙はツヴィングリに送られ、彼がそれを「適当な時点で」当局に手渡すというのである。市参事会がツヴィングリの旅を拒否しても、「わたしは、方伯の指示に従うでしょう」（かつてルターが、あらゆる悪魔がさえぎろうとも、ヴォルムスに赴いたように）。こうして、申し出は無条件に受諾されたのである。ツヴィングリの手紙がラテン語で書かれたのは、方伯がラテン語を一言も解しなかったことを知らなかったにしても、スイスの方言がヘッセンの方言と違っていることを考慮したものにはほかならない。この事情は、もちろん、まもなく明らかになった。そして、ヘッセン方伯とスイス宗教改革者のあいだのドイツ語の文通は、われわれがもっているもっとも美しい、くつろいだ友情の通信となった。そこでは、宗教と政治において、きわめて深い、内面的な信仰の結び付きがみられた。「学識高き、とりわけ愛すべき、親しきウールリヒ師」、「恵み深き、愛すべき主人にして父」と、そこここで強調されているのである。つねに秘密の国家行為を意味した書簡の仲介役を最初から引き受けたのは、シュトラスブルク市長ヤコブ・シュトゥルムであった。

方伯の公式の招待状が発せられたのは7月1日であった<sup>26)</sup>が、同時にルター、メランヒトン——方伯はその同意を確保していた——、エコランパッド、ヤコブ・シュトゥルム（ブツァーともう一人の説教者への招待状は「穏やかで、なごやかなものだった」）、ニュルンベルクのアンドレアス・オジアンダーへの招待状が送られた。どの書簡もじっくりと考えられて、個別に書かれていた。ゲオルク・フォン・ブランデンブルク＝アンスバッハの要望で、シュヴェービッシュ＝ハルのヨハネス・ブレンツにも公式の招待状が送られた。はじめは、討論は二人のヴィッテンベルク人と二人のスイス人のあいだで、「友好的、非論争的に」行われるはずであったが、方伯が政治家ヤコブ・シュトゥルムを「流動的な原因から、とくに好んで」同席させようとしたとき、それは秘密の政治的ニュアンスを見せはじめ、そのことは、ツヴィングリの招待状のなかにも記されていた。到着期限は9月30日、開催地はマールブルクと定められていた。ツヴィングリの旅程としては、シュトラスブルク、そこからヴァスガウ（ツヴァイブリュッケン公ルートヴィヒ二世の領地）、ザンクト・ゴアル（カッツェネンボーゲン下級伯爵領地）を経て、マールブルクへいたる路が指定されていた。フランクフルトの秋の大市をおとずれる商人が通る——危険度の高い——路が選ばれなかったのは、指定の路が護衛に適していたからである。帰路にも、護衛が保障された。

要望に応じて、方伯は市長ならびに市参事会に宛てた書簡も添付した。方伯の書簡がまず差し出された市の上級当局、いわゆる枢密参事会は、基本的には同意を与えたが、しかし、「信用のならない、すばやい頭飾り〔フェルディナント〕——カトリックとの政治的紛糾——に照らしてみても」ツヴィングリをそんなに遠くまでいかせるわけにはいかない、それゆえ、討論会の場所をシュトラスブルクに変えてほしい、と要望した。そして、最終的には、自分たちには国法的に判断する権限がなく、大・小参事会に判断をゆだねたい、と釈明した。しかし、それこそツヴィングリが欲しなかったことであって、彼はここで「拒絶」されることを怖れていたのである。さらにその場合、高度な

政治問題が公衆の前にさらされるのは別としてもである。ツヴィングリはこうした秘密の漏洩を予想し、秘密を隠し通そうとし、討論会の期日を通知せず、日程が確定するまで事柄を秘密にしておく承諾をえた。方伯の友人たちには、彼は、討論の場所としてシュトラスブルクがいいと推奨していたが、しかし、「裁きの場」が変わらないというのであれば、マールブルクへ出掛けていくと、はっきりと約束をしていた。「なにがなんでも」出掛けていく、と<sup>27)</sup>。方伯は、こうしてツヴィングリを完全に確保した。すべてを失敗させないためには、討論の場はマールブルクでなければならなかった。シュトラスブルクはルターにとって認め難かった。遠距離であるばかりでなく、改革者ブツァーが素っ気ないくらいにはっきりとルターに告げていたように、その都市はツヴィングリに傾斜した町であったからである。チューリヒ市長、同枢密参事会、ツヴィングリ、ヤコブ・シュトゥルムに宛てた書簡で、方伯は、シュトラスブルクが適当でなく、マールブルクを所定の場所とする、と通知した。枢密参事会は、8月10日またもや、「期間が長すぎる」と、決定逃れの返事をした。その間にも、ツヴィングリの旅程が決まった。9月18日にシュトラスブルクを出て、ヴァスガウに入り、19日ツヴァイブリュッケンに到着する、と。9月18日金曜日、夜10時、ツヴィングリは、妻さえも知らないうちに、こっそりとチューリヒを出立した。随行したのはグロースミュンスター学校のギリシア語教授ルードルフ・コリンであったが、彼の学識からではなく、古くからのウールリヒ・フォン・ヴェルテンベルクのための闘士であるという理由から、同行者に選ばれたものである。彼らはジール〔チューリヒ市の北の境界〕を越えたところで夜を明かした。おそらくパンナーヘル・シュヴィッツァーのところで宿ったものであろう<sup>28)</sup>。ツヴィングリの生涯にとって新しい時代、ヨーロッパ政治への参入が始まったのである。

#### 注

- 1) Wessel Gansfort については、Gerhard Ritter, *Romantic and Revolutionary Elements in German Theology on the Eve of the Reformation*, in: E. Ozment, *The Reformation in Medieval Perspective*, Chicago 1971, p.28ff, esp. p.32f. を参照。
- 2) Huldreich Zwingli's *Sämtliche Werke* (以下、ZW. と略す) IV (1982). S.512f., 517f., 560. 『原典宗教改革史』(中村・倉塚編、ヨルダン社、1976年) 289-291頁。W.Köhler, *Zwingli und Luther* (以下、Z.u.L. と略す), Bd.1, 1924, S.61f.
- 3) Pierre d'Ailly (1350-1420) フランスの神学者。カンブレ司教、枢機卿、国王シャルル五世の告解聴聞師。コンスタンツ公会議で活躍。公会議優位説を説いた。
- 4) 『原典宗教改革史』 291頁以下。書簡の日付けは、1524年11月16日である。Köhler, Z.u.L.I, S.72f.
- 5) ルターとカールシュタットの論争、カールシュタットの生涯については、『ルター著作集』第1集第6巻(聖文舎、1963年) 37頁以下の解説に詳しい。
- 6) Leo Jud (1482-1542) 1507年バーゼルの St.Theodor 教区の助祭。1523年チューリヒの St.Peter 教区牧師。ツヴィングリの死後、その著作の管理・整理に当たった。
- 7) Z.u.L., I, S.178f.
- 8) *Vom Abendmal Christ, Bekenntnis 1528*, in: D.Martin *Luthers Werke(WA)*, Bd.26(1909), S.241-509. 『キリストの聖餐について、信仰告白』は、上掲の『ルター著作集』第8巻(1971年)に翻訳がある。
- 9) 'Sermon von dem Sakrament des Leibes und Blutes Christi, wider die Schwärmgeister', WA, Bd.19(1897), S.474-523.: 'Daß diese Wort Christi <Das ist mein Leib> noch fest stehen wider die Schwärmgeister 1527', WA, Bd.23, S.38-320.
- 10) 'Amica Exegesis, id est: expositio eucharistiae negotii ad Martinum Lutherum', 'Freundliche Verglimpfung und Ablehnung über die Predigt Luthers wider die Schwärmer', 'Daß diese Worte: Das ist mein Leib usw. ewiglich den alten Sinn haben werden usw.'. いずれも ZW.V., S.548-758, 763-794, 795-977.

に所収。なお、Verglimpfung は、字義通りに訳せば「寛大さ」であろうが、本文始めのところでツヴィングリは 'dise verantwort' と述べており (S.771)、「弁明」と訳すことにした。同語はスイス方言で「刺針」の意味があり、容赦のないルターに対する反撥の意味を込めている。また、1526 年に書かれたツヴィングリの『聖餐論』(出村彰訳)の翻訳がある。『宗教改革著作集』第 5 卷(教文館、1984 年)269-349 頁。

- 11) Z.u.L.,I,S.99f.,108f.
- 12) ZW.IV(1982),S.440-504:Z.u.L.,I,S.105.
- 13) Johannes Faber(1470-1530?) パドヴァ大学で学ぶ。1507 年アウクスブルクのドミニカ教団修道士会長。1511-24 年南ドイツ・ドミニカ教団総長。皇帝顧問。
- 14) Thomas Murner (1475?-1537) ドイツの諷刺詩人。はじめシュトラスブルクのフランチェスコ教団修道士会長。宗教改革とともにルーツェルンに逃れ、改革派と闘う。
- 15) 'De vera et falsa reigione commentarius',ZW.III (1914),S.590-912.
- 16) カエターヌスのツヴィングリ論文の分析については、Z.u.L.,I,S.159ff.
- 17) Wolfgang Capito(1478?-1541) バーゼルの司祭を経て、1521 年マインツ司教座聖堂説教師。宗教改革派に移行して、シュトラスブルクに移り、ツヴィングリと親交。『四都市信仰告白』を書く。
- 18) Caspar Hedio (1494-1552) はじめバーゼルの St.Martin 教区助祭。1523 年以降シュトラスブルクの司教座聖堂説教師。1549 年同市聖職者会々長。プロテスタント最初の教会史家。
- 19) Matthäus Zell(1477-1548) 1507 年フライブルク大学長。1518 年シュトラスブルク司教座聖堂説教師。1523 年宗教改革者中最初にカタリーナと結婚。論争を嫌い、救霊事業に専心す。
- 20) ヴェルテンベルク公ウールリヒ (1498-1550) は、はじめ皇帝に忠実であったが、のち離反するようになり、1512 年、シュヴァーベン同盟からも脱退した。そのころ前代からの債務は、公の奢侈も加わって、膨大なものになり、それを農民に転嫁しようとして、「哀れなコンラート Der arme Konrad」の反乱を招き、その鎮圧後、身分制議会と「チュービンゲン協約 Tübinger Vertrag」の締結を余儀なくされた。その内容は、戦争の開始とその費用支弁については、事前に議会に諮ること、住居移動の自由、職業選択の自由を承認することなどを主とするものであったが、その後も公には、これを無視する行動が多く、再度の農民一揆を惹起した。公にはまた、家臣の妻に横恋慕して、その夫を刺殺する行為があり、これに愛想をつかした公妃サビーネが実家のバイエルンに逃げ出し、公はバイエルンを敵に廻すことになり、皇帝によって「帝国追放」を宣言された。にもかかわらず、公は、議会を代表する人物を大逆罪に問うて、無残に処刑するという暴挙に出、1519 年には、帝国都市ロイトリンゲン Reutlingen を領邦都市に変えようと圧政に出るにいたって、ついにシュヴァーベン同盟の武力介入を招くにいった。

ウールリヒは国外追放の身となり、代わって、ヴェルテンベルクはハプスブルクの委任統治領となった。1520 年 2 月 6 日、シュヴァーベン同盟は、戦費の肩代わりを条件に、皇帝カール五世に統治を付託し、カールは弟オーストリア大公フェルディナントにそれを委任したのであった。追放されたウールリヒは、フランス国王のもとに逃れ、アルザスにあった家領ホルブルク Horburg、ブルゴーニュのメンベルガール Mompelgard に本拠を置き、フランスの資金で公国南端に接するホーエントヴィール Hohentwiel im Hegau を購入して、公国奪回のチャンスをねらったが、その機会はなかなか訪れず、1530 年、アウクスブルク帝国議会で、皇帝カールは公国をフェルディナントに正式に授封したのであった。

その間、時流に敏感なウールリヒは、バーゼルの説教師エコランパッドの影響を受けて、宗教改革を受容した。ただし、戦線を狭めないために、ルター派、ツヴィングリ派いずれにも偏らないように留意したのであるが。これに目を付けたのがヘッセン方伯フィリップである。彼は対ハプスブルク大連合政策展開の一翼にヴェルテンベルク公復位問題を編み込み、1526 年、ウールリヒをマルブルクに迎え入れた。シュマルカルデン同盟が結成されると、1534 年、フィリップとウールリヒは大軍を率いてヴェルテンベルクに進攻し、ハプスブルクの代官を撃破した。このときザクセン選帝公ヨハン・フリードリヒが仲介に入り、ウールリヒはフェルディナントから封土としてヴェルテンベルクを受け取り、ようやく復位を果たしたのである。ヨハン・フリードリヒが仲介したことから、ヴェルテンベルクではルター派が公認宗派となるが、1546 年のシュマルカルデン戦争で大敗し、ウールリヒは皇帝の前に跪いて許しを乞い、30 万グレンの賠償金を支払って、アルバ公率いるスペイン占領軍から公国を請け戻さねばならなかった。ウールリヒがその波瀾に満ちた生涯を終えたのは、1550 年 11 月 6 日のことである。K.

Weller, Württembergische Geschichte im südwestdeutschen Raum, 7. Aufl., 1972, S.96-100, 162-165.

- 21) Z.u.L., II(1953), S.25.
- 22) Z.u.L., I, S.220f.
- 23) ZW.X(Briefwechsel 4) (1982), Nr.835a, bes.S.108.: W.Köhler, Das Buch der Reformation Huldrych Zwingli, München 1931, Nr.137 (S.287): J.Kühn, Die Geschichte des Speyrer Reichstags 1529, Leipzig 1929, S.240.: Z.u.L., II (1953), S.27.
- 24) シュヴァーバツハ簡条書の作成経緯については、Z.u.L., II.S.41-49.
- 25) ZW.X, Nr.839: Köhler, Das Buch, Nr.238(S.287): Z.u.L., II, S.49
- 26) ZW.X, Nr.868, 868a.: Das Buch, Nr.239(S.288-291)
- 27) Z.u.L., II, S.60.
- 28) Das Buch, Nr.243(S.295): Z.u.L., II, S.60.

## 2. 第一次カッペル戦争<sup>1)</sup>

「チューリヒの当局者たち」が慎重であったのは、十分な理由があった。スイス誓約同盟内の事柄が、ツヴィングリ自身も判断していたように、「良好であることは稀であった」。血なまぐさい戦争はかろうじて回避されたが、「なにか戦争のような蜂起への立ち上がり」がないかどうかは、不確か以上のものがあった。ベルン討論会と宗教改革派の側における政治的結集の影響のもとに、新教は急速に東スイスに普及した。——それも、チューリヒを模範とし、基本的にはつねにツヴィングリの意志にしたがって、行われたのであるが、そのツヴィングリは、軍司令官のように、みずから、あるいは自分の信任した人物を通じて作戦を現実政治に見合って指揮し、暴力をふるうことにたじろがなかった。しかし、その背景には、福音主義の不断の勝利があった。ルター、あるいはツヴィングリによって代表される良き宗教改革者の原則は、世俗権力と神の言葉の説教という根本的に対立する二つのものが結び付いた教会諸侯に対して抗議することであった。ツヴィングリの故郷〔トッゲンブルク地方のヴィルトハウス村〕はこのような支配、すなわち、ザンクト・ガレン修道院長の支配下にあったが、新しい福音はこの地域においてもずんずん広がり、チューリヒが、ツヴィングリの助言を受けながら、背後から宗教改革運動を強めたのであった。修道院長はその所在地を移動しなければならず、はじめはヴィルへ、次いで1528年10月にはロールシャハに移らねばならなかった。ザンクト・ガレン市は修道院襲撃を企て、いよいよその行動に着手しようとしたとき、チューリヒにそのことを知らせた。チューリヒはそのためにベストを尽くすであろう、最悪の場合には、ザンクト・ガレン市のために生命と財産をなげだすという、いわば白紙委任状を約束したのであった。1529年2月23日、ザンクト・ガレンの大聖堂では聖画像が破壊された。ツヴィングリの目標は、「ザンクト・ガレン修道院を、その修道士と支配権ともども、廃止へもっていくこと」、つまり世俗化するところにあった。地政学的には、それによって出先地〔フォルアールベルク〕からのオーストリア軍のスイスへの侵入にブレーキが掛けられるはずであった。しかし、修道士たちはチューリヒよりは機敏で、老齢の修道院長が死ぬと、新院長を選んだ。だが、チューリヒの軍隊はザンクト・ガレンの地を占拠し、その隊長は、今日占領軍が征服地にまず郵便局を設立するように、チューリヒのモデルにならって結婚裁判所を設けた。国法的には、この政策は、チューリヒがルーツェルン、シュヴィーツ、グラールスと共同で修道院領にもっている保護権を名目にしたものであったが、現実には専断的軍事力の行使であった。ツヴィングリの生まれ故郷であるトッゲンブルクに対しては、

チューリヒは、武力によってそこでの宗教改革を押し戻そうとする共同支配州シュヴィーツに対抗して、5000の兵でこれを守ろうとした。ツヴィングリは、シュヴィーツにならった地域法を、トゥゲンブルクとチューリヒの都市同盟<sup>ブルクレヒト</sup>によって置き換えようと考えた。

こうした征服政策に対するカトリック諸州の対抗策は、オーストリアとの政治的同盟で頂点にたった。両者のあいだには、1524年レーゲンスブルクでの会合以降ずっと密接な結合がつけられていた。1528年、ベルンのオーバーラントでカトリックの蜂起が起こったとき、オーストリアはすでに軍事的援助をしている。1529年2月、フェルトキルヒで同盟条約草案が固められ、同4月22日、ヴァルズフトで国王フェルディナント・フォン・オーストリアとの「キリスト教同盟」が最終的に締結された<sup>2)</sup>。それは、シュパイヤーで、ヘッセン方伯がツヴィングリに招待状を送った日である。関連性はすぐに明白になった。オーストリアは、カトリック・スイスを帝国の大カトリック同盟に組み込もうとおもっており、その同盟に、宗教改革の喉首を締め付けようというシュパイヤー帝国議会決議が帝国法的基礎を与えていた。それに抗議して、方伯はツヴィングリと対抗同盟を結ぼうとしたわけである。こうしてスイスは、神学的にも政治的にも、あらゆる側面から帝国の宗教改革の問題に巻き込まれることになった。

フェルディナントとカトリック五州の同盟では、6月にオーストリアとスイスの代表委員の会合が予定され、トーマス・ムルナーの手紙によれば、そこで「いつ、どのように事を起こすか」決められるはずであった。ムルナーはいう。「鐘が铸られつつあり、われわれはまもなくその鐘を鳴らし、その音は遠くまで響き渡るであろう。われわれは、まもなく長槍と上等なヘレバルデで、信仰問題に決着を付けるであろう<sup>3)</sup>」。つまり、ここでもまた宗教戦争が決意されていたのである。すでに戦争の松明が明々と燃えていた。共同支配地のガスターで、チューリヒの領域に住む教区牧師ヤコブ・カイザー Jacob Kaiser が、ガスター地区のオーバーキルヒの福音派教区牧師に選ばれ、その任地へ赴く途中、ガスターで説教していたところ、シュヴィーツの守護<sup>フォークト</sup>の手下たちによって襲われ、ガスター裁判区からシュヴィーツへ連行され、チューリヒの抗議にもかかわらず、1529年5月29日、焚刑に処せられた。西方では、サヴォアが、かねて支配下に引き寄せようとしていたヴァリス〔ヴォー〕と同盟を結成し、ここに信仰戦争準備の包囲網は完成した。

ツヴィングリは、予防戦争によってこれを打破しようとした。五州らの同盟が配備につくまえに、これを打ちのめさねばならない。6月8日、チューリヒは宣戦布告をした<sup>4)</sup>が、もちろん、それは「正義と公平さに反する数多くの違反、暴力、傲慢」に対する提訴という形を取っていた。民衆への呼びかけは、次の言葉で結ばれている。良き神の栄光のため、かかる犠牲と危険を身に引き受けよう。チューリヒの兵は十分に装備され、4月8日以来、ほぼ12400人の部隊が動員されていた。作戦プランはツヴィングリによって作成され、ベルン、その他の同盟都市の兵士を合わせた30000人以上の部隊が、カトリック側の9000人と対峙することになった。すべては計画通りに順調にすすんでいるようにおもわれた。トゥールガウ、ライントール、ザンクト・ガレン地域が占領され、オーストリアのライン河渡河地点は遮断された。さまざまな地点へ送られた部隊は、シュヴィーツ人の氣息をふさぎ、反撃力を崩壊させた。チューリヒの主力はツークへ向かった。ツヴィングリは従軍説教師として、馬に乗って同行し、脇にはヘレバルデを抱えていた。ルターだったら、武装した聖職者を見たら、どう思ったことであろう？「もしわたしが兵士で、戦場で坊主、あるいは十字の旗を見たとしたら、そして、それが十字架そのものであったとしても、わたしは、悪魔に追われているかのように、逃げ出すであろう」。ツヴィングリは、ここでは一体性を感じており、いわば「自由

意志から」行軍に参加していた。この戦争は彼の戦争であり、激しい感情を込めて、彼はこの戦争に自分を投じていたのである。「神のためになにか勇敢なことをなせ」と、彼は戦場からチューリヒ当局に勧告している<sup>5)</sup>。彼は、年代記者サラートがまさしく述べているように、「最高軍司令官であり、事柄全体の統率者」であった

カッペルで前進は停止した。グラールス州の首長ハンス・エブリが平和交渉を始め、チューリヒ人に、国境を越えるまえに、交渉の結果を待つように頼み込んだ。戦死者の未亡人や孤児にとっての戦争の悲惨さ、過去の嚇々たる戦いにおいて、肩と肩を接して戦ったという思い出に立脚したスイス人の共同体意識、誓約同盟の名誉、その内部分裂の姿を外国にはさらすべきでない、そういった事を彼は秤にかけて論じた。そして、彼はチューリヒの当局者に国民としての訴えを貫徹しようとした。その訴えは、軍隊の指導者には、そして、ツヴィングリには完全に通らなかった。「わたしは、問題はなにかを十分に心得ている。いまや正しい言葉を与え、お願いし、ねだりたい。しかし、あなた方を誤らせたり、泣き言に屈したりさせてはならない。つまり、われわれが戦場から退去すれば、彼らは一ヶ月後にやってきて、われわれと戦うでしょう。神を信じなさい、正義が確立されるまで、泣き言にかかわってはなりません<sup>6)</sup>」。しかし、交渉はすすみ、平和へとたどりついた。厳重な規律がこの二週間、チューリヒの陣営を支配し、売春婦はおらず、略奪はきびしく禁止され、説教へ兵士たちを集める太鼓が毎日轟いた——ツヴィングリ以外に陣営には説教師はいなかった。「可能ならば、流血が避けられ、再びキリスト教的誓約同盟が神の愛において統一されることを」と、人々は祈った。

「われわれは平和をもたらしたが、それは、わたしが希望していたよりも文字通り名誉あるものであった。なぜなら、われわれは流血を避けるつもりはなかったからである」と、ツヴィングリは、6月26日の平和締結ののちに書いている。「われわれのへどの出そうな相手は、濡れた毛皮を持ち帰っただけである<sup>7)</sup>」。それはまさしく正しいことであり、ツヴィングリは、誇らしげに一つの事実をあげている。すなわち、フェルディナントとの同盟文書が、夜中の二時頃、カッペル修道院の広間で、彼の目の前で、グラールス州首長によって、ナイフで「はじめ長い革紐状に、ついで細片に切り裂かれ」、そして、火に投げ込まれたというのである<sup>8)</sup>。さらに、誓約同盟の共同支配地の村々では信仰の自由が保証され、各教区で信仰について多数決で決定され、州当局がそれを承認することになった。しかし、ツヴィングリの平和構想<sup>9)</sup>は、それとは異なっていなかったにしても、それ以上のことを要求していた。「第一点、五州は、新約、旧約聖書に依りて、自由に説教させること」というのである。しかし、まさにこのことは保証されなかった。なぜなら、「神の言葉については、なにびとにも強制されるべきではない」からであるが、実際には、決定はカトリックの手中にあり、反対に福音派の側では、もちろん、別のことが考えられているのである。「神の言葉は、ミサ、画像、儀式といったほこりをすべて、あっさりと払い落とす」というツヴィングリの敬虔な願いは実現されなかった。「第二の点、五州は、外国の権力者からの〔傭兵募集報酬としての〕年金受領を永久に断念すると誓うこと」も、平和条約のなかの願望にとどまった。そのときの年金受領者の処罰という要求も拒否され、戦争費用の補償金額の確定は、調停人の手中にゆだねられた。

「君たちの欲している平和は戦争であり、わたしの欲している戦争は平和である」。この苦いツヴィングリの判断は、現実政治的には正しかった。スイス内部における宗教改革の危機の解決は見出されず、荷車は居座ったままであった——「主よ、みずからこの車をお上げください!」。カッペルの戦場では、ツヴィングリの歌が歌われていた。「神は悪しき奴の処罰をなさって、みずからの名を

あげられた」。この歌に、当時の状況がはっきりと示されている——すなわち、ツヴィングリは、まさにそのとき、背中に負ったスイスを「おとなしくさせ」、宗教的外交政策へ乗り出そうとしていたのである。彼は、外見上そうであり、彼自身もそうと信じていたようには、事態の主人公ではなかった。彼が引っ張ろうとしている荷車には、一筋以上の歯止めの鎖が掛けられていた。その一番目の結び目は、誓約同盟の連帯意識であった。兵士たちは、自分の同胞たちに対して戦おうとはせず、まさに開戦寸前というのに、相手側とパンを砕き、ミルクを飲み合った。前進途上にあったシュトラスブルク市長ヤコブ・シュトゥルムは、ブッリンガーの語っているところによると、敵味方一緒になってミルクの桶からスプーンでミルクをすくって飲んだという出来事を聞いて、次のように述べたといわれる。「誓約同盟員はすばらしい人々だ。不一致といわれながら、彼らは実際は一致しており、昔の友情を忘れてはいないのである<sup>10)</sup>」と。「すばらしさ」は、もちろん、シュトラスブルク人が考えたよりも、もっと深い意味をもち、それがあがるかぎり、宗教戦争を行うことはできない。この点で、ツヴィングリは、自分の都市の代表者たちの同意を欠いていた。しかし、人民代表者からなる都市共和国において——彼は事実上、その預言者であった——人民の意志に反する政策を長らく行使することができるだろうか？ ひそかにツヴィングリがマールブルクへ出立したとき、問題であったのは、彼が都市当局に新しい道を指示できるかどうかであった。もっとも困難な障害をなしたのはベルンであった。ベルンは攻撃政策を否定し、彼らの部隊に、敵方への国境を越えてはならぬ、チューリヒが攻撃されたときだけに介入せよ、と命令していた。年金を断念せよというツヴィングリの要求に対しては、けわしく突き返した。ベルンはこの点で自身悩んでおり、その他の点では、地理的、経済的に制約されて、独自の政策を追求した。ベルンは西方に向かっては、サヴォアに対して、ジュネーヴ経由のフランスへの商業路の安全を確保することに重大な関心を持ち、東方の第二戦線は重荷以外のなものでもなかった。カトリック五州が、ベルンを南方から攻撃する位置にあるヴァリスと同盟を結ぶにいたって、その感を強めた。あちこちの宗教改革者との人間的繋がりにあって、ベルンは運動のブレーキにとどまり、そして、このベルンという国家なしには、大掛かりな誓約同盟政策は不可能であったのである。

それに対して、もちろん、ツヴィングリは新たにバーゼルを獲得した。ここでは1529年2月、嵐のように、ついに宗教改革が貫徹し、新政府は、当然ながら、よろこんで政治的支持へと乗り出した。シュトラスブルクとチューリヒから政治的支持を求める声きたとき、宗教改革市政府はすぐに、2月15日、全会一致でチューリヒ、ベルンとのキリスト教都市同盟への加盟を決議し、厳かに宣誓した一週間後の3月3日、バーゼルは加盟を実現し、6月には五州に対して宣戦布告をしている。バーゼルに、シュトラスブルク人ブツァーがもっとも愛された福音の説教者として招かれ、それによって両都市の結び付きはますます密接なものとなり、バーゼルは、シュトラスブルクのキリスト教都市同盟への受け入れを促進した。そういうわけで、ヘッセン方伯の計画は、ここでは始めから、即座に受け入れられ、マールブルクへ旅立つエコランパッドに、市参事会員一人を同伴させた。このことがツヴィングリへ知らされて、はじめてチューリヒもそれに倣うこと<sup>なら</sup>にしたのであった。宗教改革をおこなったバーゼルは、シュパイヤー帝国議会で、帝国によって告訴され、オーストリアのフェルディナントは、バーゼル司教管区をエンジスハイムにある前オーストリア政府の保護下におき、バーゼル市から逃げてきた司教座本山聖堂会員たちはこの官庁の管轄下に入り、コンスタンツ司教座とも密接な連絡を取り合った——チューリヒはここでも、反対する戦線に直面しなければならなかった。



ツヴィングリは、マールブルクへ出立するさいに、自分に忠実な州の旗を数えてみたが、その数は十分にあった。当時彼は、政治的宗教的影響力の頂点にあった。シャフハウゼンはツヴィングリ派となり、1529年10月末、チューリヒとの都市同盟に入ったし、グラールス——以前、ツヴィングリはその『67ヶ条注解』をこの州に捧げたものである——では、友人のフリードリッヒ・ブルナー **Fridolin Brunner** が、1528年から1529年にかけて、福音主義派に勝利をもたらしていた。グラウビュンデンでは、司教座のあるクールから、州東端のエンガデインの諸溪谷にいたるまで、宗教改革信仰が浸透していた。アッペンツェルについては、ツヴィングリは次のような感じのいい冗談をいっている。「褒むべき誓約同盟の諸地域のなかで、アッペンツェルは最後にあげられる地域——同地が誓約同盟に属するようになったのは、ようやく1513年のことである——であるが、こと信仰問題にかけては、まこと最小でも最後尾の地域でもない」と。ラインタールからボーデン湖沿岸にいたるザンクト・ガレン地域は、チューリヒによって支配されており、ゾーロトゥルン、ユヒトラントのフリブール、ルーツェルン、シュヴィーツ、ウーリ、ウンターヴァルデン、ツークといったカトリック州においても、ツヴィングリの信奉者がいた。共同支配地、とくにトゥールガウについては、いうまでもない。西スイスにおいても、宗教改革が静かに始っていた。1529年7月半ば、彼が、キリスト教都市同盟に結集した諸都市チューリヒ、ベルン、コンスタンツ、バーゼル、ザンクト・ガレン、ミュールハウゼン、ビールに対して、「あらゆる預言者のなかの君主」である預言者イザヤに関する彼の解釈を捧げているとき、ツヴィングリの得意を思うべきである。彼はその解釈によって、「国王や都市、人民たちのために警告のラッパを吹き、人々に道を告げ知らせた」と称しているのである。「それがわたしの義務であり、そうすることによって、宗教が興隆し、純潔はよみがえり、公正さが支配するにいたるであろう」とも、付け加えている。ヘッセン方伯が招いたのは、グロースミュンスターの説教師ではなく、その権限が実際よりももっと大きい一人の政治的指導者であった。ツヴィングリがマールブルクへきたとき、「彼の手は汚れている」といわれた。なぜなら、彼の手には、宗教的協調へのとばされた政治がくっついているから、というのである。この判定は誤っている。というのも、それは歴史的状況に照らして正しくないからである。マールブルクの交渉における宗教と政治の結び付きに罪があるとすれば、それは、ツヴィングリだけでなく、交渉全体にいえることであった。マールブルク会談は、1529年のシュパイヤー帝国議会によってつくられた福音派の連合の必然性から生まれた一つの政治的行為であった。そこで問題となったのは、純粹の宗教・神学論争ではなかった——ルター派にとって、そして、まさしく彼らにとっても、単なる神学論争ではなかった。彼らは、政治の前に神学の糸を紡ぎ、同盟の前に信仰告白を置いたのである。

#### 注

- 1) 本章については別稿を用意しているので、注釈は最小限にとどめた。
- 2) 「キリスト教同盟」の条文、および同盟締結の経緯については、次の文献を参照。Köhler, *Das Buch*, S.252-260; H. Escher, *Die Glaubensparteien in der Eidgenossenschaft und ihre Beziehungen zum Ausland*, Frauenfeld 1882, S.49-72; O. Vasella, *Österreich und die Bündnispolitik der katholischen Orte 1527-1529*, 1951, S.68-121.
- 3) J. Dierauer, *Geschichte der schweizerischen Eidgenossenschaft*, Bd.3, 1921, S.140.
- 4) Köhler, *Das Buch*, Nr.226(S.260-264).
- 5) ZW.X, Nr.858: *Das Buch*, Nr.229.
- 6) *Ibid.*
- 7) ZW.X, Nr.866: *Das Buch*, Nr.233.

- 8) Ibid.
- 9) ZW.X,Nr.855:H.Bullinger,Reformationsgeschichte,II(1838),S.163-175:Das Buch,Nr.228(bes.S.269) ツヴィングリ (森田安一訳)「チューリヒ市長、市参事会、拡大市参事会宛ての書簡」(『宗教改革著作集』第5巻、教文館、1994年)353頁以下。
- 10) Bullinger,II,S.183:Köhler,Das Buch,Nr.231.『原典宗教改革史』292頁。

### 3. マールブルク会談

1529年9月7日、オーストリアの側に情報が伝えられた。「去る土曜日(9月4日)ツヴィングリほか一人が徒歩でブルグに到着した。バーゼルへ向かっているといわれる。そこで、彼はフス教徒(エコランパッド)と合流し、シュトラスブルクへ進み、そこからヘッセン方伯のところへ赴き、ルターとの討論会をもつはずである」。秘密は保たれなかつただけでなく、すでに8月に、聖ミカエル祭の日にマールブルクで宗教討論会が開催されるという「キリスト教的で、褒むべき噂が広く、遠方まで」鳴り響いていた。ただツヴィングリは徒歩ではなく、高価な貸馬に乗って、ブルグを経て、9月5日日曜日、バーゼルに入った。ここから彼は、チューリヒの市長ならびに枢密参事会に、出立の事後追認を求め、持参した35クロネでは不十分であるので、20クロネの前貸を頼んでいる——後から派遣された市参事会員ウルリヒ・フンク Ulrich Funk が金を持参した。ツヴィングリの妻には、「一人の女に話すには過大なことであるが、すべてのこと」を知らせてやってほしい。「わたしは、事柄がうまくいくのを望んでいます、いまわたしが、チューリヒから離れたからといって、少しも怖がることはない、と<sup>1)</sup>」。9月6日早朝、ツヴィングリとエコランパッドとは、「講演と討議に呼ばれて」という偽りの名目をつけて、フランクフルト大市へ行く信頼できる商人と一緒に船に乗り、十三時間の航行ののち、夕方9時、シュトラスブルクに着いた<sup>2)</sup>。到着直後に書いた手紙で、ツヴィングリは、早速チューリヒに政治的情報を伝えている。皇帝がイタリアに上陸し、フランス国王は、人質として皇帝の手中にあった自分の息子たちを解放するために、ミラノを放棄した、と。シュトラスブルク人は、政治的情勢においては二人のスイス人よりも、より早く事情に通じていたようには見えなかつたけれども、である<sup>3)</sup>。

シュトラスブルク市参事会は名誉をたたえるワインを寄贈し、一人の参事会員は、市政府の命令で、客人たちに市の防衛施設を見せて回った。ツヴィングリは伝えている。「人々は、われらとわれら(チューリヒ)の同僚に対して、言い知れぬ丁重さと名誉をたたえる態度を示した」。二人は、司教座聖堂の説教者マテウス・ツェルとその実直な妻カタリーナのもとに泊まり、9月12日日曜日午前、ツヴィングリは司教座聖堂で、エコランパッドは同日夕べ、同所で説教した。司教座聖堂の図書室で神学者たち——シュトラスブルク市参事会は、スイス人の同行者としてカスパール・ヘディオとマルティン・ブツァーを定めた——は、マールブルク討議のために学問的研究にたずさわった。イングランド人ベータ(紀元700年頃の人)に、聖餐論争に使えるような文章を見つけた。ヘディオはそれを書き写したが、マールブルクではそれは利用されていない<sup>4)</sup>。政治的交渉がいかにか大きかったかを示すものであろう。シュトラスブルクは、チューリヒとの政治的都市同盟の締結を急いでいた。ツヴィングリは、とりわけ、カール五世とその弟オーストリアのフェルディナントの目的について打ち明けられた。それは、政治的パンフレットや外交文書によってであるが、残念ながら、くわしいことは判らない。ツヴィングリは、その一部をチューリヒへ送っている。ハプスブルクの

政策カルテが発見され、その結果はツヴィングリを震え上がらせた。彼が知ったフェルディナントの政策の一端は、ドイツ農民戦争以後、都市に向けられ、都市は、「次々と」鎧と武器によって滅ぼされねばならない。スイス人は、「現在あるすべての政府、諸侯、騎士団のうち最悪のもの」とされている。スイス人を滅ぼす（ひっくり返す）にいたるまで打撃を与えるのに、いまが絶好のチャンスである。なぜなら、彼らはお互いに分裂しており、その一部は教皇、オーストリアのフェルディナント、シュヴァーベン同盟を味方に付けているからである。「ルター主義の分派を完全に根絶やしにする」ために、すべての聖界・世俗の諸侯は、教皇、フランス、ロレーヌをふくめて、結集しなければならない。そのために、フランスのフランソワ一世は皇帝の捕虜の身から釈放されるべきである。そして、上に述べたように、都市はすっかり消耗させられなければならない」。最終目標。「こうして正規の政府は古くからの信仰にとどまることになる」。それは、福音主義を、とくにスイス人のそれをもふくめて、根絶するための大政治的結集の計画以外のなにものでもなかった。ツヴィングリは、そこから、チューリヒの都市同盟計画についての実践的教訓を引き出し、9月17日付けの枢密参事会宛の報告でそれを述べている。すなわち、同盟者コンスタンツに注意をうながして、「皇帝がアルプスの山を越えないように、彼をイタリアでやっつけることを、ヴェネツィアに呼びかけてはどうか」というのである。この共和国との直接的同盟はまだ考えられてはいない。さらに、〔フェルディナントの計画に関して〕問題を誓約同盟の会議に提出すべきである。なぜなら、事はチューリヒだけでなく、誓約同盟全体の根絶が計画されているからである<sup>5)</sup>。ヘッセン方伯との〔同盟の〕政治的計画については、ツヴィングリのこの手紙では、なお語られてはいない。しかし、ツヴィングリはシュトラスブルク人から——このシュトラスブルク人は、1529年のシュパイヤー帝国議会への市代表の参列によって全体の流れに精通していた——説明を受けて、全体の状況を把握し、ヘッセンの同盟政策を受け入れる心の準備をして、マールブルクへ向かったのであった。

9月17日、出発の準備が整った。チューリヒからは、ツヴィングリ、出版業者のフロッシュャウアー Froschauer、ルードルフ・コリン、市参事会員のウールリヒ・フンク、バーゼルからはエコランパッドとルードルフ・フライ Rudolf Frey、シュトラスブルクからはヘディオ、ブツァー、ヤーコプ・シュトゥルムが一行のメンバーである。——各都市とも、神学者とともに、政治家を添えている。これに召し使いとして五人の従者が付け加わった。おそらく9月18日日曜日（訳者、土曜日?）、早朝6時、一行は馬に鞍をおき、第一日はヘレンシュタイン城に着き、そこからファルツ伯ルートヴィヒの騎乗兵が護衛についた。二日目はホルンバッハ・バイ・ツヴァイブリュッケン、三日目はリヒテンベルク、四日目はマイゼンハイムに入った。五日目は休息し、六日目はザンクト・ゴアルのラインフェルス城に到着し、ここで方伯の領地内に入り、そこへ入るところで、ヘッセンの騎馬兵がファルツの護衛を引き継いだ。七日目はニーダー・ブレッヘンに着き、そこでおそらく一日休息し、九日目はギーセン、そして、十日目の9月27日月曜日、午後4時頃、一行はマールブルクに着いた。「そこで方伯はその城で愛想よくわれわれを迎え、各人と親しく挨拶をかわした<sup>6)</sup>」。6月23日、方伯にしぼしぶ来ることを承諾したルターは、同信者のメランヒトン、ユストゥス・ヨナス<sup>7)</sup>、カスパール・クルシガー Caspar Cruciger、ゲオルク・レーラー Georg Rörer、おそらくもう一人ファイト・ディーテリヒ Veit Dieterich をともなって、三日後の9月30日に現れ、10月2日土曜日午後には、南ドイツ人のオジアンダー<sup>8)</sup>、ブレンツ<sup>9)</sup>、アウクスブルクのシュテファン・アグリコラ<sup>10)</sup> がやってきた。方伯はすべての来訪者を城に宿泊させ、食事を供した。なおその他の神学者、教授、政治家などがヘッセン、フランクフルト・アム・マイン、ケルンからやって来たが、「秘蹟主義者」「熱

狂主義者」カールシュタット、あるいはケルンのゲルハルト・ヴェスタールブルクは入城を拒否された。シュバイヤーでツヴィングリ派とこの嫌われ者のグループとがはっきりと区別されたあとでは、彼らの入城は政治的に不可能であった。マールブルクはお祭り気分で、教授エウリキウス・コルドゥス Euricius Cordus は賛歌を詩作し、「鋭敏な」ルター、「穏和な」エコランパッド、「能弁な」メラニトン、「勇敢な」ブツァーと讃えている。その他の神学者もすべて、名誉ある呼称が付けられているが、ツヴィングリには、二、三年後に彼の友人の君主、方伯も手にした尊称「高邁な magnanimus」が与えられている<sup>11)</sup>。彼の外貌は全く神学者らしくなく、黒い軍装を着用し、その上に革ベルトをして、長ったらしい剣を下げ、大きな袋を携えていた<sup>12)</sup>。

ルターらの到着を待つあいだ、方伯は城中で、自分の前でエコランパッド、ツヴィングリ、ヘディオに説教させた<sup>13)</sup>。ツヴィングリは神の摂理について話した。それが、1530年にラテン語で印刷されたもの<sup>14)</sup>とほぼ同じものであったとすれば、それは、選り抜きの聴衆を前にしての、文字通りアカデミックな説教であっただろう。ルターがそれを聞かなかったのは幸いであった！説教は、繊細に仕上げられた自然な神学であり、合目的性から神意を説明し、世界、とくに人間の崇高さ、美しさを述べている。すべての被造物は神の種族であり、あらゆる存在は、その種類にしたがって段階つけられるが、神から生まれ、神の手中にあり、神は最高、真実、単純、純粹、総体のものとして、それらの上を予定的に支配し、それらの中に神の生命力を注ぎ込む。ストア派、セネカ、プリニウス、さらにプラトン、ピタゴラス、ルネサンスの哲学者ピコ・デルラ・ミランドーラからの汎神論的思想が差し入れられ、それらが意識的に弁護されている。「わたしは、ここに借用してきた異教徒たちも神的であると、あえていいたい。真理はどこで、だれを通じて述べられようと、ひとしく、つねに聖なる霊から発するものなのである」。不変の、たえず新たに生じ来り、また消えていく現象諸形態にあらわに出てくる存在の本質という大胆な考えが押し出されている——ツヴィングリの著作は、一貫して、彼の思考世界から人文主義が排除されなかったことを証明している。そして、この人文主義の、かつてバーゼルでツヴィングリも踏み入れたことのあるスコラ学の「古い道」に対する関係は、トーマス・アキーナスの場合の、神の摂理という基本的考えときわめて相似している。すなわち、神の摂理は、すべてを、悪さえをも支配している、という考えである。「正しく考察した場合、その高慢さの故に永劫の罰に下された悪魔もまた、神の正しさを証明するものではなかろうか？」「正しい考察」というのは、哲学的には、善を知らせるために悪は必要なのだ、と説くストア派の哲学をさし、宗教的には、神の予定説をさしている。実際にツヴィングリは、それらの説に立って、アダムの墮罪を神の予定から説明する。しかし、その<sup>みなもと</sup>源は単なる神の正しさではなく、神の善なのである。彼が、この難しい、深い宗教的概念世界へ突入したとき、ツヴィングリの思考の流れは力強く音を立てている。ここでは宗教改革者が語っているのであり、自由意志の自立性を否定したルターの弟子が語っているのである。「信仰は、選ばれた者の証しである。この選びこそが、〔選ばれた者を〕真実、至福にする。選びが、開花のように、先行しなかったならば、信仰もまた決して実を結ばないないであろう」。しかし、ツヴィングリは、異教徒をも神によって選ばさせ、ローマ教皇よりもソクラテスやセネカを愛すべき者としているのである。「神の選びは自由である」。方伯がこれらすべてを理解したかどうかは問題であろうが、彼はそれが印刷に付されることを望み、ツヴィングリがその印刷物に付した「高貴なるヘッセン公のために」という献辞のなかで、次のように書いたのも、方伯が正しく理解したことを確信したからであろう。「われわれが宗教の核心を正しく把握した場合には、そのほかの意見の相違は重要ではありませんし、そのために愛の絆が引き裂

かれるということもありません。このことを理解しているのは、あなただけです<sup>15)</sup>」。

9月30日の両派のあいだの挨拶は友好的なもので、エコランパッドとルターは二、三言葉を交わし、ブツァーに対しては、宗教改革者は笑いながら、指をふりつつ、「おまえはしようがないな！」と脅した。ルターは、ツヴィングリとは顔を合わせなかった。方伯が彼にツヴィングリの来ることを伝えていなかったからである。ヴェルテンベルク大公は、夕刻にやってきた。

10月1日、早朝6時、エコランパッドとルター、ツヴィングリとメランヒトンが、各々差し向かいで友好的話し合いをするように命じられた。エコランパッドは、自分が追加的に「連れて来られた」と感じており、ルターを、バーデン討論会でがみがみしゃべりたてたエックと似ているとおもった。ツヴィングリとメランヒトンの予備討論は友好裡にすすんだ<sup>16)</sup>。まず言葉と霊の関係について、話し合われた。ヴィッテンベルク人は両者を結び付け、スイス人はそれを分離し、そのため熱狂者の心霊主義者の嫌疑におちいった。中間の線で一致しようということになった。神は、説教者という人間の言葉のヴェールを通じて働き給うからである。原罪については、あっさり認め合った。ツヴィングリは、人間の罪の相続については否定していたが、その問題については争わないとした。しかし、罪なくして死んだ幼い子供が永劫の罰に墮とされるかどうかという問題については、ツヴィングリの討論は、もちろん完全に論理的とはいいがたいが、肯定に固執した。なぜなら、子供の場合でも、死は罪人にとっては、支払われる給与であり、罰だからである。また聖餐問題も取り扱われ、意見の一致がえられた。すなわち、晩餐では、霊的食事が行われたのである。なぜなら、「食する」とは「信ずる」を意味しているのだから——完全にツヴィングリ的解釈である。したがって、不信者によるキリストの身体と血の享受〔味わうこと〕は除外される。しかし、一体、キリストの「身体」を味わうとは、いかなることか？ その身体が「カペルナウムのもの」でないことについては、一致できた。すなわち、カペルナウムのユダヤ人たちは、ヨハネ福音書第6章の記事によれば、肉を歯で噛みちぎったといわれるが、そのような肉でないことについて、一致したのである。しかし、メランヒトンにとっては、身体は実際に存在しなければならないのに対し、ツヴィングリにとっては、キリストの身体は、たとえ身体としての特性をもっている、つまり輪郭で限られたものであるにしても、実際には「身体」とは別物であり、天に座しておられるのである。そこから、議論はキリスト論に移ったが、ツヴィングリは、救世主の神性、また三位一体の教義を十分に認めていた。この問題の議論では、シュトラスブルク人〔ブツァー〕の評価はあまり芳しくないものであった。6時間におよんだ予備討論で、よい発端がえられたとの印象がもたれた。メランヒトンは、繰り返しいったものである。「親愛なるツヴィングリ君、わたしを信じなさい。わたしがあなたの代弁をしてよいというのなら、わたしは、はばかりことなく、喜んでそれをやりましょう<sup>17)</sup>」。もちろん、メランヒトンはルターではなかった。ルターは、同日、ブツァーとも会談したが、顔を見るなり、毒づいた。「この悪魔め」——ルターは、統一には確信がもてなかったのである。

次の日、10月2日土曜日、またもや早朝6時、厳粛なときが来た。「公開の、友好的で争いではない討論」が始まった。城の騎士大広間ではなく、方伯の寝室に隣りあった居間で、せいぜい50、ないし60人の選ばれた聴衆を前に行われた。ブッリンガーによれば、ツヴィングリはもっと大きな公開討論を望んだが、ルターが反対したといわれる。方伯は、討論の始めから終いまで居合わせ、その他の聴衆は出たり入ったりしていた。四人の討論者は一つのテーブルに座り、そこに、午後に現れたとき、三人の南ドイツ人オジアンダー、ブレンツ、アグリコラも座を占めた。討論用語はドイツ語で、ツヴィングリは自分のスイス方言を考慮して、ラテン語が好ましいとおもったが、方伯

がラテン語を解しなかったのである。ツヴィングリが期待した公式の議事録は、ルターの希望で行われず、なんらか記録することは禁じられた。幸いなことに、二、三人の聴衆がそれを聞き入れず、ラテン語で書き留め、ドイツ語の断片をそれに挟み込んだのであった。ルターはスイス・ドイツ語を好まず、それを、つまらない地口で「シュヴェツェリシュ」とか、「けちけちした、もじゃもじゃしたドイツ語で、理解するまえに、汗をかいてしまう」と呼んでいる。ツヴィングリが帝国のドイツ人領主たちの前でどのような言葉で話したかは知らないのであるが、一カ所でラテン語の報告が逆翻訳を要求されている。「悪く思わないでください、と。nüt für unguet<sup>18)</sup>」。

私情をまじえずに討論をしてほしいと勧告したヘッセンの官房長官ファイゲ Feige の開会の挨拶ののち、驚くべきことに、発言を求められたルターは、聖餐問題だけでなく、「キリスト教の他の諸点についても討議したいと要求した。そういうものとして、彼は七点をあげたが、それは、ほとんどキリスト教の教義全体にわたるものであった。つまりルターは、信仰告白をおこなった人間である自分を明白に見せびらかした。「こうしたすべての事柄について同じ考えを確立しないかぎりには、聖餐といった真の尊い問題について論じても無駄であろう」。スイス人の抗議にルターは譲歩したが、しかし、自分がいま言明した諸箇条において、ツヴィングリの著作の考えと一致するものではない、という発言を撤回はしなかった。

10月2日、3日、土曜日と日曜日、午前と午後にわたって討論が行われた。ルターが一方の側の代表者であり、メランヒトンが一度だけ言語学的訂正のために発言し、オジアンダーが二度、ブレンツが一度だけ発言した。他方の側では、エコランパッドが聖書ならびに教父たちからの論証、ツヴィングリが教義の説明で発言し、最後にブツァーとシュトゥルムがシュトラスブルクの信仰教理を擁護した。しかし、ルターはいまやこうした問題に立ち入ろうとはしなかった。「わたしは、あなた方の教師になろうとはおもわない。わたしは、わたしの著作と信仰告白において、意見を述べている<sup>19)</sup>」。ツヴィングリが繰り返し新約聖書の文章をギリシア語で引用したのが、ルターを怒らせた。彼はそこに、公衆の集まりを前にしての自慢ぶりを感じ取ったからであるが、また人文主義的な相手ほどには、ギリシア語の新約聖書に詳しくなかったからでもある。ツヴィングリの方は、いくぶんの誇りと少々嫌みったらしい皮肉をこめて、次のようにいって〔ルターの怒りを〕そらした。わたしは十二年来ギリシア語のテキストに慣れ親しんでおり、ラテン語の翻訳はただ一度しか読んでいない、と<sup>20)</sup>。スイス人がヨハネ福音書6章63の箇所（「肉はなんの役にも立たない」）をあげて、相手に打ち勝った——「ヨハネのこの箇所は、あなたの首を切り落とした」——と信じたとき、ルターは<sup>たけ</sup>猛り立った。「そう自慢しなさんな。首は切れていないし、ここはヘッセンであっても、スイスではないんだよ<sup>21)</sup>」。ルターにとって革命を意味する民主主義に対する一撃というわけである。こうした軋轢はほかでも起こったが、しかし、全体として、討論は高度な水準を維持し、その鋭さは最後にいたって論争者をして、おたがいを祝福させて終わった。

よく知られていることだが、ルターは始めにチョークでテーブルの上に「これはわたしの身体である hoc est corpus meum」という言葉を書いた。それは、頑固な硬直性——ルターは確かに頑固であったが、硬直する必要性はなかった——からではなく、討論の「命題」、議論のテーマの確定のため書かれたものであった。彼はその上にビロードの掛布をかけたが、論争の頂点にたつると、掛布を取り払って、「言葉」をあらわに提示した<sup>22)</sup>。あっちこっちした議論には、条件付きではあるが、厳しい内的順序が内在していた。しかし、テーマはあらゆる側面から根本的に論じ尽くされ、論争は結論をめざして、いたらずに空転した。緑のテーブルでの論争という行為に没頭して、面と

向かい合った論者は、著作や中傷的言辞を吐いている第三者の方を見るよりは、あちこちあらぬ方を見ていた。誤りが正され、各々固有の立場が画定された。スイス人にとって、ルター派が「肉をむさぼり食う者たち」という嘲りとは相違した人たちだということが明らかになった一方、ルターの方は相手方が、敬虔なキリストの現在という信仰によって、〔キリストと使徒たちの〕共同飲食に宗教的価値を付与していることを知った。実際に双方とも、「信仰のなかで、霊的にキリストを食べる」という点で一致を見た。その上で、なおルターは現実<sup>に</sup>口を通る身体であることを要求した。何故？スイス人がその説明をもとめても無駄であり、なん千という場所での晩餐に、つねに咬み碎かれる身体が現在する——しかも、キリストの身体は昇天以来、神の右手に座っているはずなのである——という説に、論理的疑念を呈するほかなかった。ここでは、ルターは断固として、理性や論理を「数学」として拒否し、「神はわれわれのあらゆる思考をはるかに越えた方であり、神の言葉の前には譲るほかはない。下僕は主の意志をほじくり返すのではなく、目を閉じなければならない。神が、肥やしを食べよ、と命じられれば、わたしはそれをするだろう」。それに対してツヴィングリは答える。「神は、そのようなことをお命じにならない。神はうそが嫌いであり、光りであり、暗闇へと導かれることはない」。このように世界観的対立、神から遠い<sup>つみびと</sup>罪人と神にきわめて近い人間、アウグスティヌスとプラトン、宗教改革と人文主義の対立が裂け目をひろげる。「あなたが、神は不可解なことはなにも指定されない、というのが、わたしにはわからない」と、ルターはツヴィングリに呼びかける。ツヴィングリにとっては、つねに主体的動機、「霊」が決定的に価値を強調するものであった。神が啓示の言葉において語られたことを認めることができるのは、霊が神の言葉の内的核心を引き出す限りにおいて、まさに出来るのである。「わたしは、信じられるみ言葉を信ずる」と、彼は述べている。それに対し、ルターにとっては、神自身は客観的に言葉のなかに内在した、したがって、だれがそれをいおうと、どうでもよかったのである。まさに宗教の主体性化、その心霊化がルターにとっては耐え難かった。ルターはつねに、肉となられたキリストにおいて示されている、そういうものの「中に」、神を認めた。「キリストの人間性、肉に執着するのではなく、キリストの（霊的）神性へと霊を高めていこう」（ツヴィングリ）——「わたしは、人間になられた神以外のいかなる神も知らないし、それ以外の神をもとうとはおもわない」（ルター）。ここに果たして合一が可能であろうか？前者にあっては、感覚的要素であるパンとぶどう酒の「なかに」あるキリストの肉体——信仰するしないに関わりなく、発言された定置の言葉の力によって客観的となった——は、精神と物質という人文主義的、古代的緊張のテーゼによって断ち切られるが、逆にこうしたキリスト受肉の神秘性の拒否は、〔ルターにとっては〕キリストの犠牲による救済というキリスト教的救済の聖なる事実を放棄するものとして感じられた。ルターは基本的問題においては、中世的・教会的地盤に立っていた。その点で、ツヴィングリというカトリックの敵対者はそのことを正しく見抜いていたのであり、ツヴィングリの中には、神との関係に霊と霊との関係を見るような、なにか観念論的世界観といったものが動き出していた。そのことをルターもまた、別のところで信仰の力について発言しているとき、認めている。ここではなかったが、彼は、罪の許しの秘蹟において、神自身の現在による保証を必要とするとしているのである。ルターと二人のスイス人のあいだの討論の結末は友好的であり、ツヴィングリは涙を浮かべながらいった。「ヴィッテンベルクの人ほど、わたしが愛する人は、この地上には一人もいない<sup>23)</sup>」と。しかし、それを傷付けるような発言が降りかかった。エコランパッドが、悩める教会に配慮することに「神のご意志のあらんことを」と挨拶したとき、ルターが別れの挨拶にこういったのだ。「君にもう一度分別が戻ってく

るように、神にお願いしよう」。それに殴り返すような反論が返ってきた。「あなたのためにもお願いしよう。あなたにもそれが必要だから<sup>24)</sup>」。「われらの霊と君たちの霊は一致するどころか、われわれが一様の霊をもっていないことは明白である<sup>25)</sup>」という有名な言葉は、ルターがツヴィングリにいったのではなく、ブツァーに対していった言葉である。

方伯の官房長は、主人の名前において、討論の参加者に感謝の言葉を述べるとともに、「総体的に、また個別的に」さらに討議をもつ用意があることを添えた。公式の討論ののち、ヘッセン侯フィリップみずからが座長をつとめる個別会談がはじまり、フィリップは「次々と呼び出し、譲歩できないかどうか、助言、その方法について尋ねた」。実際、ルター派の方では、合意したことの公式声明文を用意さえしていた。しかし、ルター派のアンドレアス・オジアンダーがのちに述べているように、それは、一致の文章としては読めるものではなかった。オジアンダーは述べている。「もし相手側が、キリストの身体は、人間の記憶のなかだけでなく、聖餐のなかにもある、と告白するならば、われわれは、彼らの他のすべての問題を免除しようとおもっていた。キリストの身体の実在の有様が、肉体的、あるいは霊的にか、自然的にか、超自然的にか、場所をもってか、場所をもたないでかは、突っ込まないことにして。そして、彼らを再び兄弟とみなして、彼らの好むところをすべてなそうとおもった」〔しかし、聞くのも妙な話だが、ツヴィングリらはそれを欲しなかった<sup>26)</sup>〕——だが、ルター派はそれほど寛容になっていたわけではなかった。合意は、ルター、そしてまたエコランパッドによって、声明文に仕立てられたが、それは、次のように述べている。「われわれは告白する。〈これはわたしの身体である、これはわたしの血である〉というみ言葉のおかげによって、キリストの身体と血とは、真実、晩餐に現在し、現存する」。決定的な用語「真実」は、ラテン語で説明されている。すなわち、「それは、実体的、本質的に、ということであって、量的にとか、質的にとか、あるいは、場所的に云々と限定されてということではない」。さらにルターは、「友好的な話し合い」という土台に立って、「ツヴィングリ派は、キリストの身体と血の真の現在を完全に否認している」という自分の考えを表明し、エコランパッドは、ルター派に対して、「肉的思想による」ラテン語の説明を引っ込めるように求めた。しかし、ルターはそれを拒否している<sup>27)</sup>。この定式文は、内容からいっても、形式からしても、全くルター的なものであった。すでにその最初の一句、「おかげで (Vermögen)」に、キリストの身体と血を聖餐のなかに引き入れる力を聖体制定句に帰させる一句に、ツヴィングリに対する反対が込められている。そして、キリストの身体の実体的、本質的現在とは、一体なんなのか?! ツヴィングリ派からみれば、それは「数学」から解放されて、空中に漂うことになり、信仰に対して存在するだけではなく、まさに客観的に「実体的、本質的に」「身体的」現在の〔思考への〕誘惑を残すものであった。ブツァーとアンブロシウス・ブラーラーは、のちのこの定式を「無条件命令」と名付けたが、正鵠を射ているようにおもわれる。その命令は、書かれた書面の表には出てこなかったけれど。

交渉はさらに続けられた。ブツァーはすでに、キリストの身体が聖餐のなかに在り、〔そうしたキリストの身体が〕パンによって信者に与えられるが、不信仰者には与えられないことを認めようという心構えをしていたが、ルター派は、それで満足していた。つまり、不信仰者の問題は脇に放擲されていたのである。またもや一致の展望が開かれたかに見えた。しかし、〔ブツァーの〕同信者たちは、シュトラスブルク人に、「キリストの身体がパンとともに与えられる」という定式はあまりにもルター的ではないか、と説得した。まさしくほかの定式があってもいいのではないか。そのような定式は、とりわけスイスの同郷人によって誤解されるのではないか。「あの本質的、実



体的に現在し、現存するという定式は、同郷人の耳には、ここで感じられているよりも、もっと重々しいものとして響くでしょうし、(量的に限られていない云々という) 否定文句は、同郷人には理解されないでしょう。さらに、そういう文句は聖書のなかにはないのです。それ故、ツヴィングリとエコランパッドはマールブルクにおけるこの種の一致を認めないことにしました」と、のちにブツァーは回顧している<sup>28)</sup>。つまり、同郷人への配慮から、そうしたのである。彼らに対し、ツヴィングリは、非聖書的で、重々しい、カトリック的気分を起こさせる教えを提供することはできなかった。それは、カトリック的反対者の水車に水を引くだけではないか。彼自身は、「自分の心にキリストの実体的現在」を感じていたが、それは、もちろんルターの考えているようなものではなかった——同郷人への配慮が、彼をして、玉虫色の定式をも投げ捨てさせたのである。

ツヴィングリ派は、教理の相違にもかかわらず、お互いに聖餐に関して共同体を構成する用意があり、また方伯がそうするように迫ったが、しかし、「彼らにそれは完全に拒否された<sup>29)</sup>」。——それは、400年たった1929年のマールブルクにおいても、まったく変わらなかった。しかし、そのように分裂すれば、方伯は、ルター派、ツヴィングリ派、シュトラスブルク派に共通した政策を考えられない敗者になり、ルター派の信仰告白が同盟を閉め出すことになる。そこでヘッセン方伯は、天才的な試み、自分なりの信仰告白、いわゆるマールブルク信仰告白を作成した。にもかかわらず、である。会談の予備討論において、また会談それ自体のなかで、耳をそばだてることを知っていたひとにとって、合一の契機が現れていたのに、どうして、それを信仰告白にまとめあげることができなかったのであろうか？もちろん、ルターが主導権を握っていたのにちがいないが、譲歩するのは相手側の意向いかんにかかっていた。そして、この条項作成の共働者〔ルター〕が、その対立物〔シュヴァーバツハ条項〕作成の中心人物であった場合、合意の成功はシュヴァーバツハ条項へのしっぺ返しを意味していた。しかし、ルターがそれを欲したであろうか？「〔その欲しなかったことをすること〕それがルターに命じられたことであった」と、ヨハネス・ベンツは報じている<sup>30)</sup>。

マールブルク条項<sup>31)</sup>は、10月4日、提示され、三通りの箇条書に署名がなされた。一方の側では、ルター、ヨナス、メランヒトン、オジアンダー、アグリコラ、ベンツによって、他方の側では、エコランパッド、ツヴィングリ、ブツァー、ヘディオによって、である。一通は方伯に、一通はスイス、シュトラスブルク人に、一通はルター派によって保持されることになった。こうして統一文書が生まれたわけであるが、その手本として、ルターはシュヴァーバツハ条項を使ったが、スイス人はその要望を通すことができた。

信仰告白は十五条から成っているが、神の三位一体から始まって、神の子イエスの誕生、原罪、救済、洗礼、悔悛、伝承、そして聖餐に及んでいる。手本の体系はずらされている。というのも、聖餐問題が最後に来ているからであり、もちろん、シュヴァーバツハ諸条項からはその鋭い角が削り取られておる。統一が問題であったことは、選ばれた定式文から見ても明らかである。また聖餐を扱った最終条項にしても、五重の共通確認によってどっしりとしたものになり、不一致は副文章のなかに押しやられ、それにすぐ引き続く主文章においては、再び双方の側の積極的な共通した態度が表明されている。この重要な条項の名人芸ともいべき定式化にあたっては、方伯がみずからかかわったと推測される。侯がルターとこの条項をめぐる、結論ですべてを駄目にはしないと、意見をたたかわした、とブツァーは報じている。ミサ供犠という考えを否定し、〔パンとぶどう酒の〕両種の形態での聖餐の実施という点で一致して、反カトリックの共通戦線が確認された。それが文書化されているのを見るのは、スイスの反カトリック論者にとっては貴重なことであ

たが、彼らはルターを自分たちの側に引き寄せるようと汲々としていたのである。さらに聖餐は「秘蹟」と認められた。すなわち、それは客観的に恩寵の賜物であり、ツヴィングリが考えたような、純粋に主観的な想起のための晩餐ではないとされた。「イエス・キリストの真の身体と血の秘蹟」と、鋭く定義されさえしている。さらに定義は、統一点に触れ、靈的受領は各キリスト教徒にとっては「特に必要なこと *furnemblich von noten*」としている。もちろん、「特に *vornehmlich*」は、「すべてひっくるめて *susschließlich*」ではないが、しかし、それは核心問題を確認したものであった。われわれ双方は、キリストの真の身体と血の靈的受領を必要と告白し、いまそれが〔文書に〕述べられたのである。こうして秘蹟の意味について一致が見られた。弱い良心は、聖書によって信仰へと導かれねばならない、という末尾の文章。もちろん、この定式も種々解されうるもので、それは、いま行われている合意の性質にかかるものであるが、しかし、いろいろ多くのことは述べられず、統一が強く突出している。この五重の大きな合意ののちに、はじめて副文章のなかで、「キリストの真の身体と血がそのままパンとぶどう酒のなかにあるかどうかについての不一致」の語句が出てくる。それについていかに考えるか、という立ち入った説明はない。そして、「今回は」和解にいたらなかった、といわれるとき、将来は和解にいたるかもしれない、という希望がほのめかされる。そして、現在は、お互いにキリスト者の愛を約束して別れよう、という文言となる。もちろん、「各人の良心がつねに悩むことのあるかぎり」という限定詞がつくが。この文句はルターに帰せられるものである。方伯は、そのような限定詞の削除を強く要請した。「キリスト者的良心の持ち主ならば、そのような相互にキリスト者的愛を示すことに尻込みすることはないであろう」から。しかし、ヴィテンベルクのひとは、「キリスト者的愛」は敵に対する愛をも容認する（マタイ福音書5、44）という、その兄弟愛を拒否した。聖餐条項は、全能なる神が「その霊によってわれらに正しい理解を示されるよう」、神に熱心に懇願することを相互に義務付けて終る。「アーメン」は、文書全体の神聖性を確認するものである。方伯は、なお個人的に、双方の同意なしには、お互いに相手を批判するようなことはなにも書かない、という約束を取り付けた。これによって、お互いを毒する論争は回避されることになった——約束が守られる限りにおいて、ではあるが。

「イギリス熱病」、つまりペストの発生が急ぎの解散をよぎなくさせた。方伯は10月5日、木曜日早朝、退去し、同午後、ルター派はマールブルクを離れた。ツヴィングリ派も同様にしたとおもわれ、彼らは10月13日、シュトラスブルクに着き、10月16日土曜日、バーゼルで騎馬行を終え、翌日、ツヴィングリはその地で説教をしている。10月19日、木曜日午後5時、彼はチューリヒに帰着した。おそらく、ブルグで一夜を過ごしたのであろう。

こうして、あとのことになるが、いまやルター派の閉鎖的な信仰告白に対抗して、一つの同盟結成の告白が生まれることになった。それは、対抗者として効力をもつものであったろうか？ 傷は開いたままではないか？ その傷は、新しい企てのなかで閉じられるのであろうか？ 方伯はその好例を示した。ヘッセン領については、マールブルク条項は、国家法としてではないが、事実上、教会法上の基礎となった。スイス人〔ツヴィングリ〕の著作が異議なく読まれ——ニュルンベルクなど他所では、それは禁書になっていた——ルター派、ツヴィングリ派が、相互に論難されることなく、呼吸し、領邦君主の意志がこの寛容を保護していた。それは文字通り容易なことではなかった。聖職者のなかには強力なルター党がおり、「キリストの身体を食べない者」は、聖餐において、試験に落ちる危険性があった。「たとえ、その食べない者がパウロ自身であろうとも」である。フィリップ・フォン・ヘッセンは、ツヴィングリを個人的に自分の領地に引き取ろうとおもっていた。ツヴィ

ングリは拒否した。彼は、その居場所を変えるには、教区牧師以上の存在になっていたのである。しかし、ツヴィングリは、チューリヒを模範とした教会会議を導入するように説得することに成功した。「マールブルク会談は多くのいいことを、われわれのもとにもたらしました」と、ヘッセンのある教区牧師は認めている。オストフリースラントでは、1530年の教会条例において、マールブルク条項が聖餐理論の基礎となった。また広い世間がそれを知ったということも、書簡やパンフレット類がそれを証明しており、カトリックの学者ヨハン・コッホラエウスは、マールブルク論争について三冊以上の著作をあらわしているのである。

新しい信仰告白は政治過程に影響を及ぼした。もちろん、会談で主役を演じた二人、ルターとツヴィングリ、そして彼らの同志たちが、マールブルクに不満を抱いて故郷に帰り、まさに統一——方伯が目標とし、14カ条において達成した——に達したと感じなかったのは、致命的に作用した。それによって、この重要な業績が単なるエピソードと化するおそれがあった。ルターは、マールブルクでの振る舞い全体にわたって優越感、勝利感を見せびらかそうとした。その限りにおいて彼は自分自身に満足しており、相手側との統一は、彼にとって、ほとんどあらゆる点において、相互の了承にもとづくものではなく、彼の見解の正しさの承認、ツヴィングリの敗北にもとづくものと考えられた。「途方もなくへり下って、彼ら（スイス人とシュトラスブルク人）は平和を懇願した」。彼らは、マールブルク条項の全戦線にわたって、最後の一弾をも撃ち尽くして、打倒されたものと見なされた。メランヒトンは、ツヴィングリが自説を「撤回」したともいっており、オジアンダーは、一点また一点と、相手側の統一意志が弱体化させられた、と書いている。さらに、オジアンダーとルターは、ただちにマールブルク条項を印刷させた。そのさいルターは条項に、1528年にツヴィングリの聖餐論に鋭く反対した著作の末尾に付けた自分の『信仰告白』を添えた。オジアンダーは序文を書いたが、この宗教論争を、「誤てる者を説得して、基本的真実の認識、信仰告白へと導いたもの」として位置付け、条項はその成功の証しであるとしている。

それは、チューリヒの感情を逆なでした。「誤てる者」は明らかにツヴィングリ派を指していた。ツヴィングリも、そうでなくても怒っていた。彼はルターのことを「愚かで、でたらめなおしゃべり」といっていたが、彼にとってもまた、だれが勝者で、だれが敗者か、が問題であった。彼は方伯と「ヘッセンの全廷臣」の賛同をえて、相手にたいする優位を誇っていた。マールブルク条項に対する彼の判断は、ルターの場合とは全く逆である。「真実が明白に勝利したのであり、もしだれかが負けたとすれば、恥知らずで、頑固なルターが明らかに負けたのである」。しかし、ツヴィングリは、特殊なものであるにせよ、ある種の統一が達成されたという感じをもっており、次のように強調している。「キリスト教信仰の〔聖餐以外の〕その他の教義について一致したいまでは、教皇はもはやなにも期待できず、ルターがそれにとってかわるであろう<sup>32)</sup>」。その統一感も、方伯の帝国政策への展望を開くものにはならなかったにせよ、スイス内部の政治にとっては文字通り展望を開くものであった。エックやファーバーによって、ツヴィングリとルターのあいだに打ち込まれた<sup>くきび</sup>楔、ヴィッテンベルクのひとをカトリック側に引き寄せようとした楔は、打ち砕かれた。さらに、そこで達成された統一は、スイス内部のカトリック反対派に対する足かせとして「上出来」なものであった。そこから、影響力のある宣伝材料が取られる。ツヴィングリは、統一をそれ以上には、またそれとは違ったふうには評価しなかった。ルターとの統一をさらに推し進めていこうとは、彼は考えていなかったが、それをしたのはブツァーであった。ツヴィングリにとっては、ルターからはもはやなにもものも期待できず、いまやこの面において、ルターにかかざらうことはなにもなくなった

——ブツァーに対するツヴィングリのわがままな態度に注目しなければならないが、ツヴィングリは統一という問題には、もはや基本的には関心を失っていた。「宗教の守護」のために、新しい守護者、ヘッセン方伯をえた。もちろん、ツヴィングリは、さし当ってそれを、マールブルクで侯と協議したこと自体と理解していた。ツヴィングリは侯に強い信頼をおいていたが、マールブルクの合一を〔限定付きで〕評価したように、そんなふうには、新しい友が抱いている重大な関心を〔過小に〕見ていた。すなわち、信仰上の違いを和解させようというこの福音派ドイツ領邦君主の関心に対してであるが、その関心にこそ、〔スイス福音派と〕ルター派帝国諸身分層との結合がかかっていたのである。方伯はルター、ザクセン選帝侯、その同信者たちへの配慮をけって失わなかったし、〔それを失えば〕帝国諸機関内や自分の政治的形態のなかでの紛糾以外のなにものでもない、そうするわけにはいかなかった。それに対して、スイス人ツヴィングリはその「外」に立っていた。であるから、ヘッセン侯がブツァーに次第に傾いていったことは十分理解できる。ブツァーはいまや、ツヴィングリがマールブルク以後もはや建設しようとはしなかったルター派に対する懸け橋となった。しかし、このような状況のもとでは、マールブルク条項は政治的に影響力を発揮できるであろうか？

ツヴィングリもまた、すぐさまチューリヒの印刷業者フロッシュアウアーのところでマールブルク条項を印刷させた。ルターの敗北のあかしとしてではなく、またチューリヒ教会の信仰告白の基礎としてでもなく、カトリックという敵に対するルターとの同盟という国政上の文書としてであった。印刷物の公開の日、10月24日、日曜日、彼は市政府当局に公式の報告をし、教壇のうえから民衆に文書を公表した<sup>33)</sup>。教壇からの報告は、一字一句にわたるものであった。もちろん、自分の解釈を織り込み、聖餐に関する結語については、彼は、「信仰の主要事項が承認された」と判断すべきだ、と述べている。人々は、彼が話したことを、ほとんど喜ばしい勝利感をもって聞いた。われわれは、なにも失わなかったのだ！やさしいエコランパッドは、マールブルクの会談から、少なくとも平和への徴候を感じと取り、別れの握手を、兄弟愛のそれではないにしても、快いものとして受け取った。彼もまた、誇りと勝利感を味わっていた。「愛において、われわれは勝っていた」。しかし、愛は言葉を導かず、政治と熱狂的信仰を導いた。

ルター派の同信者たちにとっては、マールブルクの会談は、自分たちがシュヴァーバツハ条項にもとづいて努力してきた基礎固め作業の喜ばしからぬ中断であった。いまや、その挽回をはからねばならない。ニュルンベルク、シュヴァーバツハ、最後に11月末、シュマルカルデンで会合がもたれた。方伯と南ドイツ人、とくにシュトラスブルクの獲得が問題になった。ツヴィングリ派は、ここでは問題にならなかった。「パウロの言（『テトスへの手紙』3、10）にしたがって、異端的人間は避けなければならない」、こう述べた「ツヴィングリ派」に対するルターの忠告が規定的となり、方伯がマールブルク条項の一致のために演じた役割は無駄におわった。彼も、ツヴィングリ派が穴をもっていることを否定できなかった。しかし、南ドイツ人もヘッセンもしつこかった。シュトラスブルク人は、毅然としてマールブルク条項に固執し、シュヴァーバツハの受領を拒否した。ウルム、コンスタンツの人々も全く同様に考えた。ここでは、信仰上の違いを越えて、政治的同盟に結集することが可能である、と主張された。「われわれは、悪しき誤れる意見をもつ人々をも、正しいキリスト教徒としての気持ちをもっていさえすれば、愛する兄弟として受け入れ、許すことができる」と、ブツァーは述べている<sup>34)</sup>。南ドイツ人や方伯は、スイス人に対して信義を守り、熱い要望があったにもかかわらず、彼らを突き放すことをしなかった。プロテスタンティズムを奉ずる二つの宗教

的政治的党派のあいだの対立は、溝を深めていった。シュトラスブルク人はそれほどではなかったが、その他の南ドイツ都市、コンスタンツ、ロイトリンゲン、メミンゲン、リンダウ、ハイルブロン、ビーベラッハ、ケンプテン、イズニイ、つまり、ウルム市長ベルンハルト・ベッセラーの指導下にあったボーデン湖周辺の都市全体は、深い動揺にとらえられた。彼らは、1529年12月30日、ビーベラッハで都市会議をもち、ルター派のニュルンベルクとの連携を決議し、スイス人との同盟を身を破滅させるものとして、これを拒否した<sup>35)</sup>。ツヴィングリにとっては、それは「完敗した戦い」であった。彼の怒りのかたまりが、彼に与するウルムの説教師コンラート・サムに宛てられた手紙にぶちまけた<sup>36)</sup>。彼は、リンダウと忠実なシュトラスブルクとがウルム人を正気に立ち返らせることを期待している。そして、都市は皇帝を自分の市壁のなかに迎え入れてはならず、あるいは、彼に対してキリスト教的兄弟としての軍事援助をしてはならない?! しかし、まさにその点に困難があった。帝国諸都市は、最高首長を怖れていた。また、帝国諸組織が、そのような行動にでることを妨げた。

ツヴィングリの怖れには、現実政治的根拠があった。カール五世が、12月初め、再びアルプスを越えて、ボローニャにあり、彼の告解聴聞師が助言しているように、神のお助けをえて不信者を打ち砕くため、機会があれば「山脈を飛び越えて」、アーレ河〔ベルン〕に襲いかかる危険性があった。カールは、フランスと教皇と平和を結び、行動の自由をえていた。1530年1月21日、4月8日にアウクスブルクで帝国議会を招集するむね、帝国諸身分に宛てた皇帝の書簡が発せられた。スイス誓約同盟にも、同様の通知がもたらされた。それによって、帝国はチューリヒの政治指導者に直接近寄ってき、〔スイスの政治という〕織物のなかに、新しい強力な糸を織り込もうと図った。その糸は場所を見つけるだろうか？糸を織り込む口はじつに多様であった。チューリヒの内政、彼らのカトリック五州とその援助者に対する外交政策、方伯との共同の対ヨーロッパ政策、聖餐論争をめぐる宗教政策、誓約同盟内外の都市同盟などなどである。それらすべては、無数の副次的諸問題、礼儀作法にいたるまでの小さな、微細な問題を包括しており、しかし、そのすべては関連しあい、からまりあっていたが、しかも糸の色ときたら、調和しているかとおもえば、はなはだしく対照的、様々であった。これを統制できるであろうか？収拾できるであろうか？世界政策——その織物に、織り糸を梭によって貫通させるようとした場合——住民7000の都市という小さな中心から、果たしてそれが可能であろうか?!政治家、預言者フルドリヒ・ツヴィングリには、巨大な課題が課せられることになった。彼は、事実上、「改革派誓約同盟の外務大臣であった」。彼は、そのことをしっかりと強く把握しており、外見上、全身これ政治家の観を呈し、政治的叡知、権力から無縁ではなく、人間的怒りの激情からも解放されていなかったが、しかし、彼の最後の拠り所はここにはなく、福音信仰にあった。そのために彼は戦ってきたのだ。「神の栄光、真理の開示、キリスト教全体の善のために」である。それについて、彼はいささかの疑いも許すものではなかった。それによって、彼は心を奪われ、幸せをえた。それによって、彼の行動に大胆さが付与されたのである。

#### 注

- 1) ZW.X,Nr.916:Köhler,Das Buch,Nr.245(S.296f.):Ders.,Zwingli u.Luther,II,S.60.
- 2) ZW.X,Nr.917:Das Buch,246:Z.u.L.,II,S.60.
- 3) ZW.X,917:Z.u.L.,II,S.60f. フランス王フランソワ一世はパヴィアの戦い(1525)に敗れ、皇帝の捕虜となっていたが、1526年3月19日に釈放され、代わりに息子アンリらが人質に取られていた。
- 4) Z.u.L.,II,S.61f.
- 5) ZW.X,Nr.921:Das Buch,S.297f.:Z.u.L.,II,S.61f.3.

- 6) Z.u.L.,II,S.63.
- 7) Justus Jonas(1493-1555) エルフルト大学で学び、法学博士。ルターの忠実な支持者となり、1521年ヴォルムス国会にルターに同行。ハレの説教師になったが、シュマルカルデン戦争で追放され、各地を転々とした。ルターの追悼演説をした。
- 8) Andreas Osiander (1498-1552) インゴルシュタット大学で学び、ヘブライ語教師となる。ルターと接触し、1522年よりニュルンベルクのローレンツ教会の説教師。ブランデンブルク辺境伯アルブレヒトの改宗に成功。1548年仮信条令(インテリム)により、プロイセンへ亡命。ケーニヒスベルク大学神学教授として生涯を終えた。
- 9) Johannes Brenz(1499-1570) ハイデルベルク大学で学び、エコランパッド、ブツァーと知り合い、ツヴィングリと親交。1522年シュヴェービッシュ・ハルの説教師。ヴェルテンベルク公国の新教化に成功。ツヴィングリの死後、ルター派に転じ、1552年シュツットガルト首座教会長。南ドイツ・ルター派の中心指導者となる。
- 10) Stephan Agricola (+1547) アウクスブルク市のルター派説教師。
- 11) Z.u.L.,II,S.66.
- 12) Das Buch,Nr.254. 末尾。
- 13) ルターの到着を待つあいだの一日、フィリップ方伯は、ツヴィングリ、エコランパッドらとの昼食会をもったが、そのさい彼は懐旧談を楽しみ、農民戦争で多数の農民を殺したことを悼み、トーマス・ミュンツァーから深い印象を受けたと語ったといわれる。Z.u.L.,II,S.75.
- 14) 'Ad illustrissimum Cattorum principem Philippum sermonis de providentia anamnema',ZW. VI /3(1983),S.1-230.
- 15) Unus intelligis,si religionis summam probe teneamus,iam caeterarum opinionum diversitatem non tante esse,ut earum causa funem charitatis,...Ibid.,S.67.
- 16) ツヴィングリ・メランヒトンの予備会談については、W.Köhler,Das Marburger Religionsgespräche 1529.Versuch einer Rekonstruktion, Leipzig 1929,S.40-48.をみよ。この書物は、マールブルク会談の討議過程を復元したものである。なお、Luthers Werke (WA), Bd.30 (1910), S.110-159.に、Hedio, Collin, Anonymus, Osiander, Brenzらの議事録メモが収録されている。そのうち「オジアンダーのマールブルク会談報告」は翻訳されている。『ルター著作集』第八巻、627-639頁。
- 17) ……Philippus aliquoties dixit:'crede mihi,mi Zwingli,si possem sententiae vestrae accedere,lubenter faciam,nihil veritus'.Rekonstruktion,S.49:Z.u.L.,II,S.83.
- 18) Rekonstruktion,S.19.
- 19) Rek.,S.38,129.
- 20) Rek.,S.30,102:Z.u.L.,II,S.106.
- 21) Rek.,S.19,76:Z.u.L.,II,S.95..
- 22) Rek.,S.9,57,105:Z.u.L.,II,S.86.
- 23) Rek.,S.37. 他方オジアンダーによれば、ルターの突き放すような言葉にツヴィングリは落涙したといわれる。WA.30,S.149. 上掲『ルター著作集』635頁。
- 24) Rek.,S.37
- 25) Rek.,S.38.
- 26) WA.30,S.150:Rek.,S.132[O]:Z.u.L.,II,S.113. 『ルター著作集』637頁。
- 27) Rek.,S.131f.:Das Buch,Nr.253(S.303)
- 28) Das Buch,Nr.253(S.304):Z.u.L.,II,S.117. ツヴィングリが同郷人の反撥を考慮してルターの合意文案を拒否したことをより詳細に考証した論考として、ケーラーの次の論文を参照せよ。W.Köhler,Zum Religionsgespräche von Marburg 1529,Festgabe für G.Meyer von Knonau,Zürich 1913,S.359-381,bes,367ff.
- 29) この時の様子をブツァーは次のように報じている。「会談の終了を受けて、方伯は、ルターたちにツヴィングリたちを兄弟として、教会の一員として認めるように促したが、失敗におわった。ルターは一時それに同意したが、しかし、すぐにフィリップ〔メランヒトン〕によって取り消された。フィリップは

皇帝とフェルディナント大公に好意を抱いていたのである ...Sic finem accepit disputatio,et coepit princeps urgere lutherum et suos,ut nos fratres agnoscerent,sicut nos agnoscimus illos, sed...frustra. Lutherum autem semel consensisse, sed mox a Philippo retractum. Philippus bene vult Caesari et Ferdinando.」 Rek., S.139f. つまり、不統一の責任はメランヒトンにあるというわけである。ケーラーはこれには触れていない。なお、Luthers Brief an Katharina Luther (4.10.1529), in: Luthers Werke in Auswahl, Bd.6 (ed. H. Rückert, 1955), Nr.201 (S.241f. u. Anm.1) ベイントン『我ここに立つ』(青山・岸訳、聖文舎、1962年) 424頁.をも参照のこと。

30) Rek., S.140 [Br-L]

31) WA.30, S.160-171. 『ルター著作集』 617-626頁。Das Buch, Nr.257 (S.304-312) は、ツヴィングリの注釈を加えたマールブルク条項の報告である。なお、次の文献にもマールブルク条項が掲載されている。Johannes Stumpfs Schweizer Reformationschronik II (hrsg.von E.Gagliardi usw.), Basel 1955, S.76-80.: Beschreibung des Abendmahlsstreites von Johann Stumpf (ed.F.Büsser), Zürich 1960, S.46-49. 解説として、Z.u.L., II, S. 119-127. をみよ。

32) Z.u.L., II, S.150.

33) Das Buch, Nr.257.

34) Z.u.L., II, S.175..

35) Ibid., S.177.

36) ZW.X, Nr.983 (S.464f.)

## 解題

訳者はいま、スイス宗教改革第一段階の最後の局面である第二カッペル戦争前後の様態を考究しているのであるが、そこでぶっかった問題にマールブルク会談という出来事がある。1529年10月、ヘッセン方伯フィリップの斡旋で、マールブルク城においてツヴィングリとルターのあいだにたたかわれた聖餐論争であるが、それは単なる神学論争ではなく、スイスとドイツの福音派のあいだに對カトリック統一戦線が結成されるか否かを決する政治イデオロギー論争であった。しかし、従来の歴史書では一エピソードとして扱われ、さっと叙述されてきた嫌いがある。確かに政治史のなかで詳しく取り上げるには異質の感のある問題であり、従来の取り扱いはそれはそれで適切といえようが、訳者としては、一応その経過を知っておきたいという衝動にかられた。しかし、膨大な研究史があるうえに、現在この問題についてのもっとも包括的で、最高の権威をもつとされるケーラー Walter Köhler の著作 'Zwingli und Luther, Ihr Streit über das Abendmahl nach seinen politischen und religiösen Beziehungen, 2 Bde., 1924, 1953.' が、通算 1360 頁にたつ大著であることを知ったときには、呆然とせざるをえなかった。とてもそれを通読する力は現在の訳者にはない。そこで、さし当っては、同著を要約した同じケーラーの『ツヴィングリ伝』 Huldrych Zwingli, Leipzig 1943. の第 9、10 章 (173 頁 - 219 頁) を翻訳し、それによってマールブルク会談の概要を紹介しようと思立ったわけである。本稿がそれにほかならない。

とはいえ、内容がきわめて難解であるうえに、ケーラーの文章が晦渋そのものであるため、訳文が果たして内容を正しく伝えているかどうか、心もとない。大方のご批判を乞う次第である。訳者の判断で、三章に分け、その表題も訳者の判断で付けた。本文には注釈はないが、後学者のために、参考になる文献、また出典とおぼしき文献箇所などを記した。〔 〕内は訳者の補足である。

ケーラーの上記『ツヴィングリとルター』は、聖餐論争を取り扱った邦訳書『ルター著作集』第

8 卷 (聖文社、1971) の解説 (611 頁以下など) の底本として用いられほど定評があるが、他方、「ケーラーは、ツヴィングリを観察するとき、再三再四主要な点、つまりツヴィングリの非常にすぐれた聖餐説それ自体を見逃してしまっている！」(F・ビュッサー『ツヴィングリの人と神学』森田安一訳、新教出版社、1980 年、94 頁) という批判もあることに注意すべきであろう。なお、ケーラーの上記著作第一卷 (京都教育大学蔵) の閲覧にさいしては、八塚春児教授のお世話になった。同氏に対し感謝を申し上げたい。(瀬原)

(本学名誉教授)